

北海道大学
サステナビリティレポート

ホクダイ イヨカシトゥリレ カンピ

2025

Hokkaido University Sustainability Report

Be ambitious



北海道大学
HOKKAIDO UNIVERSITY

02	トップメッセージ	
03	【巻頭特集】	
	北海道大学2024ハイライト	
	●「北海道大学サステナビリティ宣言」を策定	17
	●「THEインバクトランキン2025」総合ランキング世界同率44位、6年連続国内1位	2 9 14 15 16 17
	●雨龍研究林と札幌キャンパスがOECM国際データベースに登録	11 13 15 17
04	●本学の温室効果ガスの包括的なデータベース、GHGインベントリを策定	13
	●サステナビリティ/ブルーボンド「北大Ambitious債」を発行	2 4 7 9 11 13 14 15 17
05	【北海道大学の概要と活動】	
	組織のプロフィール	
	●基本データ（2025年5月1日現在）	
06	サステナビリティ推進体制	
	●サステナビリティ推進機構	
07	基本理念・ビジョン・方針等	
08	サステナビリティに関する方針・施策	
	●北海道大学のサステナビリティに関する主な計画等の体系図	
09	ガバナンス・コンプライアンスの強化	5 8 16
	●ガバナンス体制	
	●監査体制	
10	●国立大学法人ガバナンス・コード	
	●コンプライアンス	
11	サステナブルキャンパスのマネジメント手法	
	●サステナブルキャンパス評価システム ASSC	4 11 13 17
	●本学のASSC評価の推移	
12	●学外からの評価（THEインバクトランキング、CDP気候変動質問書）	17
	ステークホルダー・エンゲージメント	3 12 13 14 15 17
	●学外のステークホルダーからの意見	
	●サステナビリティに関する学内連携の体制	
13	サステナビリティ活動	
	●「HU VISION 2030～持続可能性の追求」の取り組み	3 8 9 11 13 14 15
14	●「北海道大学サステナビリティ宣言」の実現を通じて目指す姿	17
	●北海道マラソン2024におけるSDGsの取り組みが「アスレティックス・アワード2024」で最高賞を受賞	2 11 13 15 17
15	●ウェルネス推進プロジェクト「H-ARTs（ハーツ）」を実施	3 11 17
	●北大生協北部食堂に「浄水型ウォータースタンド」を試験設置	6 7 12 13 14
	●学部学生及び大学院生へのSDGs人材育成	4
16	●札幌北キャンパスにおける新たな屋外空間の整備	9 11 17
	●「北海道ワイン教育研究センター棟改修」及び「自然共生サイト認定・OECM登録に関する取り組み」が「サステナブルキャンパス賞2024」を受賞	9 13 15
	●「グリーントランスフォーメーション先導研究センター」が活動開始	7 9 13
17	●ネイチャーポジティブと地域社会ポジティブを両立させる共同プロジェクト拠点「REREC」	4 7 8 11 13 14 15 17
	●東京大学とGX推進に向けた連携協定の締結	13 15
	●構内バスを利用して自動運転システムの開発・実証に貢献	7 11 17
18	採択・認定・プロジェクト	
	●J-PEAKSキックオフシンポジウムを開催	2 7 9 12 13 14 15 17
	●半導体複合拠点の実現を目指す事業が地方大学・地域産業創生交付金に採択	4 8 9 17
	●「次世代和牛生産システム構築拠点」がCOI-NEXTに採択	2 3 9 11 12 13
19	研究	
	●グリーンランドで氷河流動変化のメカニズムを解明	13 14 15
	●カーボンニュートラル達成のための鉱物風化促進技術	1 3 6 8 10 12 13 14 15 17
	●地下水の汚染とサケ稚魚の育成との関連性を解明	14 15
	●第9回全球エネルギー水循環プロジェクト国際会議を開催	6 7 13 14 15 17
20	●日本全土の高解像度森林炭素蓄積量マップ作成に成功	13 14 15
	●世界で初めてアマモ場の供給サービスを空間的に評価	13 14
	教育	
	●官学連携「カーボンニュートラル夏季短期学習プログラム」を開催	4 13 15 17
21	●「未来志向ワークショップ 脱炭素と持続可能なエネルギー」を実施	4 13 17
	学生活動	
	●「除染土処分に関するワークショップ」北海道班が活動を報告	4 11 12 13 17
	●ハルトプライズ運営委員会が「2024 OnCampus Awards Program of the Year in Asia Pacific」に選出	4 8 9 17

22	【パフォーマンス報告 環境】	
	環境への取り組み	
	●マテリアルバランス	6 7 8 12 13
23	エネルギー消費量と再生可能エネルギー	
	●一次エネルギー消費量	7 8 12 13
	●再生可能エネルギー（太陽光）発電量	7 8 12 13
24	温室効果ガス排出	
	●温室効果ガス排出量	3 12 13 14 15
25	廃棄物／資源循環	
	●廃棄物排出量	3 6 11 12 15
26	水使用量	
	●水使用量	6
	生物多様性	
	●生物多様性にとって重要な地域を含む拠点	6 14 15
27	グリーントランスフォーメーション（GX）の推進	
	●北大の温室効果ガスの包括的なデータベース「北海道大学GHGインベントリ2022」策定	13
	●学生向けシンポジウム「北海道のGXと経済をつなぐ未来とは」を開催	4 8 11 13 17
28	生物多様性の保全に関する取り組み	
	●キャンパスの動植物の生息状況や変化を捉える生態環境調査	11 15
	●北海道の絶滅危惧植物保全に取り組む北大植物園	15
29	水資源の取り組み	
	●排水管理	3 6 12 14
	ごみ削減・資源循環の取り組み	
	●ごみの圧縮で排出量と処理費用を削減	3 11 12
	●キャンパスの大掃除「キャンパス・グリーン・デー」	3 11 12
30	環境コンプライアンス	
	●環境関連法規等の遵守状況	3 6 11 12 16
	●廃棄物の処分方法	3 6 11 12
	●有害廃棄物の適正処理	
31	【パフォーマンス報告 経済】	
	2024年度の財務構造と損益計算書	
	●収入・支出決算の内訳	
	●損益計算書（P/L）	
32	地域への貢献、地域との連携	
	●エア・ウォーター株式会社が本学理系院生に奨学金	4 9 11 17
	●Rapidus株式会社と包括連携協定—人材育成・研究開発強化へ	4 8 9 17
	●NHK札幌放送局と包括連携協定を締結	4 17
33	●北大×日本証券業協会SDGsシンポジウムに横田理事登壇	10 11 13 17
	インフラ投資と調達に関する取り組み	
	●インフラ長寿命化計画の改定	9 11
	●責任ある取引・調達の推進	8 16
34	【パフォーマンス報告 社会】	
	本学構成員の性別の推移	
	●学部生・大学院生の性別の推移	5
	●教職員の性別の推移	5 8
35	社会連携	
	●函館市と包括連携協定を締結	4 8 9 11 17
	●「自治体×北大まると交流祭!!」を開催	4 8 11 17
	安全衛生	
	●安全衛生本部が衛生管理者連絡会を開催	3 8 16
36	研修と教育	
	●出張FD・SD「北海道大学サステナビリティ宣言と教育研究活動」を実施	17
	Diversity, Equity, and Inclusion（DEI）	
	●札幌キャンパス・函館キャンパスの「バリアフリーマップ」を作成	4 10 11
	●「北海道大学 2024 DEI キャンペーン連続講演会」を開催	5 8 10 16
37	【資料】	
	編集方針について	
	●外部評価報告書	
38	●北海道大学の主な広報誌	

注：2 4 17などの数字は、各取り組みが貢献するSDGs（Sustainable Development Goals）のゴールを表しています。



SDGsとは、持続可能な社会をつくるために取り組むべき世界共通の目標です。2015年9月に国連サミットで採択され、2030年までに達成すべき17のゴールと169のターゲットが設定されています。

持続可能な Well-being社会の 構築を使命として SDGsへの取り組みを推進

GRI 2-22

「北海道大学サステナビリティレポート2025」をご覧ください。
だき、ありがとうございます。

北海道大学は、1876年（明治9年）に設立された札幌農学校を起源とし、設立当初から実施されているリベラルアーツ教育を通して、「フロンティア精神」「国際性の涵養」「全人教育」「実学の重視」の4つの基本理念を掲げ、北海道の広大な大地に根ざした総合大学として発展してきました。この基本理念を体現するべく、札幌・函館両キャンパスに加え、道内外に広がる7つの研究林や研究農場・牧場、水圏実験所といった多様な教育・研究フィールドを活用し、特色ある教育・研究活動を推進しています。

2023年に策定された「HU VISION 2030」では、「持続可能なWell-being社会の構築」を大学の使命と位置づけ、「Excellence（卓越性）」と「Extension（社会展開力）」の2つの「EX」を基盤とする「Novel Japan University Model」の実現を目指しています。

このビジョンに基づく活動の一環として、本学ではSDGs（持続可能な開発目標）への取り組みを積極的に推進しています。2024年8月にサステナビリティを共通言語として、教職員・学生等、全ての構成員の一体感を高め、倫理観を育みながら、世界の課題解決に貢献できる大学を目指すこと及び地域社会との共感を広げ、社会的インパクトのある大学としての役割を強化することへの決意を掲げた「北海道大学サステナビリティ宣言」を策定しました。また、本学の温室効果ガス（GHG）に関する実情を適正に把握するために、GHGに

関する排出量等のデータについて体系的にまとめた「北海道大学GHGインベントリ2022」を策定・公表し、カーボンニュートラル実現に向けて具体的な活動を進めています。それに加えて、生物多様性の保全が図られている区域である自然共生サイトとして国から認定された雨龍研究林及び札幌キャンパスがOECM（Other Effective area-based Conservation Measures）国際データベース（WD-OECM）に登録され、生物多様性保全においても先進的な役割を果たしています。その姿勢は、サステナビリティにおける大学の貢献度を示す「Times Higher Education インパクトランキング2025」において6年連続国内1位、世界同率44位という評価にも表れています。

本学は今後も、カーボンニュートラルやネイチャーポジティブといった喫緊の地球規模課題への対応、地域社会との連携、そしてSDGsの達成に向けた具体的な行動を通じて、持続可能なWell-being社会の実現に貢献してまいります。どうか、ご支援とご協力を賜りますよう、お願いいたします。

北海道大学総長

寶金 清博

HOUKIN Kiyohiro

1954年生まれ、札幌市出身。1979年北海道大学医学部卒、医学博士。
脳神経外科医として北海道大学病院・民間病院に勤務。2013年北海道大学病院長に就任、
2020年10月から現職。

撮影場所：札幌農学校第2農場

HOKKAIDO UNIVERSITY

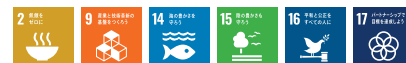
「北海道大学サステナビリティ宣言」を策定



2024年8月1日付で策定した本宣言では、「大学の教職員・学生等を含む全ての構成員に対して、SDGsを含むサステナビリティを共通言語とした学内エンゲージメント（一体感）の醸成を図り、大学としての総合力を向上させ、あわせて、サステナビリティ等の実現に当たって構成員が重んじるべき倫理観を養い、もって世界の課題解決に一層貢献できる大学を目指すこ

と」及び「このことを通じて、本学がコミュニティの中核となり、学外エンゲージメント（共感）を醸成することによって、その社会的インパクトを一層高める大学になる」という決意を掲げています。また、本学が本宣言の実現を通じて目指す姿を4つの姿にまとめた「北海道大学がサステナビリティ宣言の実現を通じて目指す姿」も公表しています。

「THEインパクトランキング2025」 総合ランキング世界同率44位、6年連続国内1位



イギリスの高等教育専門誌「Times Higher Education (THE)」による「THEインパクトランキング2025」が2025年6月に発表され、本学は、総合ランキングで対象となった世界2,318大学中、世界同率44位（国内1位）にランクインしました。

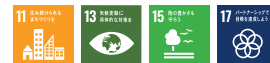
このランキングは、大学の社会貢献の取り組みをSDGsの枠組みを使って評価するもので、世界的に注目を集めています。SDG別ランキングにおいては、17のSDG目標のうち、「SDG2 飢餓をゼロに」が世界955大学中、世界2位（国内1位）と高い評価を得ました。また、「SDG9 産業と技術革新の基盤をつくろう」（世界49位、国内5位）、「SDG14 海の豊かさを守ろう」（世界17位、国内1位）、「SDG15 陸の豊かさを守ろう」（世界21位、国内1位）、

「SDG16 平和と公正をすべての人に」（世界35位、国内1位）、「SDG17 パートナリーシップで目標を達成しよう」（世界41位、国内1位）が世界100位以内にランクインしました。SDG15は4年連続で国内1位を獲得しています。

本学の強みの一つである広大で多様なフィールドにおいて、SDGsに関連する教育・研究が展開されていることが示されました。



雨龍研究林と札幌キャンパスがOECM国際データベースに登録



我が国は「生物多様性国家戦略2023-2030」において、生物多様性の損失を止め、反転させる「ネイチャーポジティブ」の実現に向けて30by30^{*1}目標を掲げています。目標実現のため、環境省は民間の取り組みによって生物多様性の保全が図られている区域を「自然共生サイト」として認定し、本学では雨龍研究林と札幌キャンパスが認定されています。

2024年8月、自然共生サイト8.4万haのうち、保護地域との重複を除いた約4.8万haが日本から初めてOECM^{*2}として国際データベースに登録されました。雨龍研究林（約2.4万ha）と札幌キャンパス（126ha）もこの中に含まれており、今回登録された面積の約半分を占め、30by30目標達成に大きく寄与することとなります。本学では今後も「北海道大学サステナビリティ宣言」に基づき、生物多様性の保全と気候変動対策の課題解決に向けた取り組みを進めます。

※1 2030年までに陸と海の30%以上を健全な生態系として効果的に保全しようとする国際的な目標。

※2 Other Effective area-based Conservation Measuresの略で、国立公園等の保護地域以外で生物多様性に貢献する地域のこと。

巻頭特集

北海道大学 2024 ハイライト GRI 2-24, 203-2, 304-1, 304-2

TY 2024 HIGHLIGHT

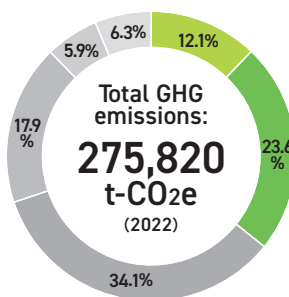
本学の温室効果ガスの包括的なデータベース、GHGインベントリを策定



2024年10月、本学の温室効果ガスに関する排出量等のデータを体系的にとりまとめた「北海道大学 GHG^{※3}インベントリ 2022」を策定しました。本インベントリは、カーボンニュートラル実現に向けた基礎資料として、本学の温室効果ガスに関する現状を適正に把握するために作成したものです。本学の全拠点・全活動を対象に、国際基準に準拠した信頼性の高いデータベースを構築しています。これらのデータは、2050年カーボンニュートラルに向けた、本学の気候変動対策を中長期的に評価・検証するための基礎データとなります。本学では今後、このインベントリを基盤としながら、カーボンニュートラルに関する具体的な目標や行動計画を順次策定する予定です。

※3 GHGはGreenhouse Gas（温室効果ガス）の略。

本学のGHG排出量（2022年度）



※表中の合計値は、小数点以下の値も含めて合算しているため、同表中の内訳の数値を合算した場合と一致しない部分があります。

Scope1	33,478 t-CO₂e	12.1%
・エネルギー起源 CO ₂	30,433 t-CO ₂ e	
・非エネルギー起源 CO ₂	44 t-CO ₂ e	
・CH ₄	546 t-CO ₂ e	
・N ₂ O	317 t-CO ₂ e	
・HFCs	2,125 t-CO ₂ e	
・PFCs	0 t-CO ₂ e	
・SF ₆	12 t-CO ₂ e	
・NF ₃	0 t-CO ₂ e	
Scope2（マーケット基準）	65,116 t-CO₂e	23.6%
・エネルギー起源の間接排出	65,116 t-CO ₂ e	
Scope3	177,226 t-CO₂e	64.3%
・カテゴリ 1	94,071 t-CO ₂ e	
・カテゴリ 2	49,396 t-CO ₂ e	
・カテゴリ 3	16,367 t-CO ₂ e	
・カテゴリ 4～15	17,393 t-CO ₂ e	
Total（Scope1+2）	98,594 t-CO₂e	
Total（Scope1+2+3）	275,820 t-CO₂e	

【北海道大学GHGインベントリ2022】概要版・本編・解説動画

🌐 <https://www.sustainability.hokudai.ac.jp/repository/ghg/>



サステナビリティ/ブルーボンド 「北大Ambitious 債」を発行

2024年11月29日、本学初の債券となる「国立大学法人北海道大学債券（愛称：北大Ambitious 債）」を、国立大学法人初のサステナビリティ/ブルーボンド^{※4}として発行しました。本債券はソーシャル性とグリーン性に加え、ブルーの要素を併せ持つこと、社会と地球環境の両面への貢献性が高いことが特徴です。債券発行で調達した資金は、HU VISION 2030の実現に向けた象徴的な共創拠点（仮称：D-Square）の整備に充当する予定です。本学のポテンシャルを最大限発揮するため、学生や教職員、地域や産業界といったあらゆるプレイヤーが共創するイノベーション・コモンズを整備することに加え、多様な交流や異分野融合、社会とのコラボレーションを促すため、学内に点在する高度専門人材の集結や、専属コーディネーターの配置といったガバナンス強化も構想しています。

※4 ソーシャルプロジェクト、グリーンプロジェクト、ブループロジェクトに要する資金を調達するために発行する債券のこと。ブループロジェクトはグリーンプロジェクトの一類型とされ、世界銀行が位置づける「我々の暮らしや仕事、海洋生態系の健康を改善し経済発展を実現するための海洋資源の持続可能な利用（ブルーエコノミー）」に資するプロジェクトであるとされるもの。

新たな共創拠点「D-Square（仮称）」のイメージ



【北大Ambitious債（投資家向け情報）】

🌐 <https://www.hokudai.ac.jp/pr/johokokai/bond/>



北海道大学の 概要と活動

組織のプロフィール

GRI 2-1, 2-6, 2-7

北海道大学は大学院に重点を置く基幹総合大学であり、その起源は1876年に設立された札幌農学校に遡ります。その後、帝国大学を経て新制大学に至る長い歴史の中で、「フロンティア精神」「国際性の涵養」「全人教育」「実学の重視」という4つの基本理念を掲げ、培ってきました。

本学は2026年に創基150年を迎えます。この重要な節目を迎えるに当たり、社会において大学が果たすべき役割の重要性を深く認識し、「世界の課題解決に貢献する北海道大学へ」向け、建学以来の理念と長期目標を踏まえた大学改革を大胆かつ着実に進めています。

基本データ (2025年5月1日現在)

- 組織名称：北海道大学
- 主要活動：教育及び研究（12学部／21学院・研究科、17研究院／25研究所・センター等）
- 学位授与数：251,756人（学士 159,288人、修士 62,060人、専門職 2,080人、博士 28,328人）
- 論文数（2024年）：3,428本※（データ出所：Clarivate「InCites TM」R7.2現在）
※2024年データについては未収録分が多数あるため参考値
- 保有特許数：1,327件（国内 765件、海外 562件）
- キャンパス所在地：
札幌キャンパス（〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目）
函館キャンパス（〒041-8611 函館市港町3の1の1）
- 土地・建物：

区分	土地(m ²)	建物(延面積m ²)
札幌市内(札幌キャンパス)	1,776,247	798,525
札幌市内(その他)	1,112,319	31,209
函館市内	105,149	39,808
その他の地方施設	657,183,747	35,633
総計	660,177,462	905,175

- 海外オフィス：1拠点
ザンビア共和国ルサカ市（ザンビア大学内）
- 教職員数：3,946人（役員 11人、教員 1,960人、職員 1,975人）
- 学生数：17,940人（学士課程 11,535人、修士課程・博士前期課程 3,599人、専門職学位課程 237人、博士課程・博士後期課程 2,569人）

基本データの詳細については、「北海道大学概要 2025」をご参照ください。
🌐 <https://www.hokudai.ac.jp/introduction/information/brief/>



サステナビリティ推進体制

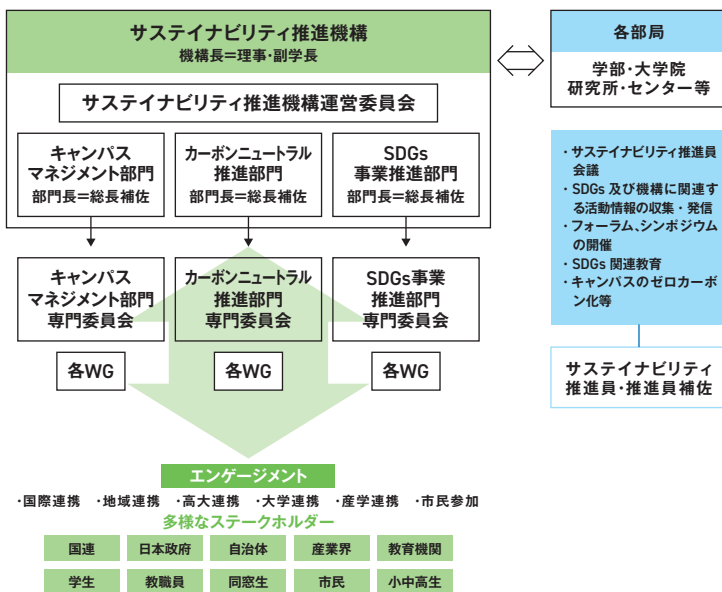
GRI 2-13, 2-24

サステナビリティ推進機構

北海道大学サステナビリティ推進機構は、持続可能な社会の構築に資する教育、研究、社会連携、及びサステナブルキャンパス構築を推進するためのプラットフォームです。サステナブルキャンパス構築を推進する「サステナブルキャンパスマネジメント本部」、SDGsに関連する教育、研究、社会連携、広報を推進する「SDGs事業推進本部」の2つを両輪としてグリーン・スマート・サステナブルキャンパスの実現を目指してきました。

2024年4月1日から、両本部の名称を「キャンパスマネジメント部門」、「SDGs事業推進部門」と変更し、さらに6月から、本機構3つ目の部門「カーボンニュートラル推進部門」を新設し、新たな体制で再スタートを切りました。

サステナビリティ推進機構の体制



キャンパスマネジメント部門

持続可能なWell-being社会の構築に貢献するため、「キャンパスマスタープラン2018」等の施策を策定するとともに、キャンパスにおける建物とインフラの適正な維持管理、歴史的建造物の保存活用、生物多様性の保全に向けた取り組み等、キャンパス・施設・環境に係る施策の企画・立案・実践を行っています。

カーボンニュートラル推進部門

本学のカーボンニュートラル達成に向けた全学的方針やロードマップの策定、生態系を保全する研究林等のフィールドの有効活用、次世代エネルギーマネジメントシステムの確立等を実施し、他部門との協働の基盤を固めます。

SDGs事業推進部門

2023年に策定された「HU VISION 2030」に明記される「持続可能なWell-being社会」の実現に向けて、SDGsに関わる教育、研究、社会連携、広報等、様々な関連事業を一元的に集約しつつ、取り組みを推進することでSDGsの達成に貢献する社会変革の原動力を創出しています。

サステナビリティ推進員制度

サステナビリティ推進機構と各部署等が連携して活動するため、各部署にサステナビリティ推進員（副研究院長等）及び同推進員補佐（事務長・施設担当等）を配置し、意見交換や連絡調整を行う推進員会議を実施しています。

【サステナビリティ推進機構】

<https://www.sustainability.hokudai.ac.jp/>


【北海道大学×SDGs】

<https://sdgs.hokudai.ac.jp/>


基本理念・ビジョン・方針等

GRI 2-23

4つの基本理念

● フロンティア精神 ● 国際性の涵養 ● 全人教育 ● 実学の重視

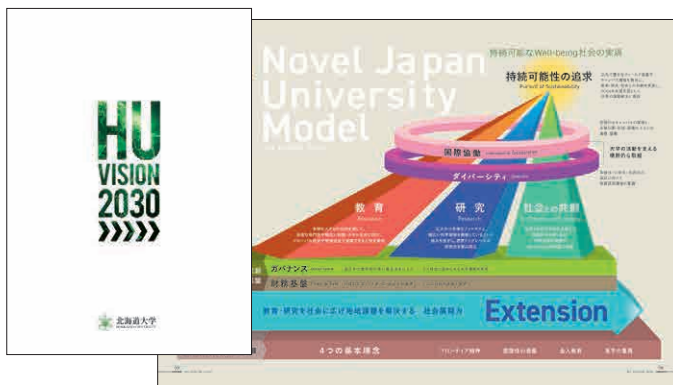
HU VISION 2030
令和5(2023)年7月策定
“ExcellenceとExtension”を
両立させる中期的ビジョン

2023年、本学は2030年をターゲットイヤーとする北海道大学の中期的ビジョン「HU VISION 2030」を策定しました。

科学技術における教育・研究の卓越性“Excellence”と、教育・研究を社会に広げ地域課題を解決する社会展開力“Extension”の2つをエンジンとして、大学自身のイノベーションを起こし、「持続可能なWell-being社会」の実現に向けた本学の強い意志と具体的な戦略を示すものです。

このHU VISION 2030では、2030年に向けた北海道大学の先導的取組を創案するための基本的方針を以下の8つの観点から提示しています。

1. 教育
2. 研究
3. 社会との共創
4. 国際協働
5. ダイバーシティ
6. ガバナンス
7. 財務基盤
8. 持続可能性の追求



北海道大学の 主な方針等

1. 教育

- 教育倫理綱領
- 北海道大学の教育における3つの方針
- 北海道大学アセスメント・ポリシー

2. 研究

- 北海道大学における科学者の行動規範
- 北海道大学における研究インテグリティの確保に関する基本方針
- 北大研究戦略 - 第4期研究戦略プラン -

3. 社会との共創

- 北海道大学の社会連携に関する基本方針

4. 国際協働

- 2040年に向けた北海道大学の国際戦略

5. ダイバーシティ

- 北海道大学ダイバーシティ&インクルージョン推進宣言

6. ガバナンス

- 国立大学法人ガバナンス・コード

7. 財務基盤

- 各種調達方針

8. 持続可能性の追求

- 北海道大学サステナビリティ宣言
- 北海道大学環境方針

共通

- 北海道大学行動規範

HU VISION 2030の詳細については、ウェブサイトをご参照ください。
<https://www.hokudai.ac.jp/introduction/plan/huvision2030/>



北海道大学の主な方針等の内容については、ウェブサイトをご参照ください。
<https://www.hokudai.ac.jp/introduction/plan/>



サステナビリティに関する方針・施策

GRI 2-23

北海道大学のサステナビリティに関する主な計画等の体系図

(令和7(2025)年4月現在、緑字：サステナビリティに関する計画等)

理念(全学)

基本理念・長期目標	
フロンティア精神	全人教育
国際性の涵養	実学の重視

ビジョン(全学)

HU VISION 2030 「持続可能なWell-being社会」の実現	
01 教育	05 ダイバーシティ
02 研究	06 ガバナンス
03 社会との共創	07 財務基盤
04 国際協働	08 持続可能性の追求

宣言・方針(サステナビリティ)*

北海道大学サステナビリティ宣言／北海道大学環境方針

計画・施策等

北海道大学 キャンパスマスタープラン	北海道大学 Climate Action Plan (仮称)
▼ 関連する主な計画等	ー2025年度 策定予定ー
北海道大学インフラ長寿化計画	▼ 関連の基礎データ
生態環境保全管理方針	北海道大学GHGインベントリ

計画・施策等(全学)

計画の連動

北海道大学中期目標・中期計画	
大綱番号㉒ キャンパスマネジメント	大綱番号㉔ SDGs・カーボンニュートラル

※関連する本学の方針等として「北海道大学の教育における3つの方針」、「北大研究戦略-第4期研究戦略プラン-」、「北海道大学の社会連携に関する基本方針」、「2040年に向けた北海道大学の国際戦略」、「北海道大学ダイバーシティ&インクルージョン推進宣言」、「国立大学法人ガバナンス・コード」、各種調達方針、北海道大学行動規範などがあります。

北海道大学 サステナビリティ宣言 令和6(2024)年8月1日策定

概要 学生や教員、経営層も含めたすべての構成員に対し、サステナビリティ等を共通言語とした学内エンゲージメント(一体感)の醸成を図り、世界の課題解決に一層貢献できる大学を目指すこと、またそれを通じ、コミュニティの中核となって学外エンゲージメント(共感)を醸成することにより、その社会的インパクトを一層高める大学になることを決意として表明している。

北海道大学サステナビリティ宣言の本文については、ウェブサイトをご参照ください。

🌐 <https://www.sustainability.hokudai.ac.jp/repository/declaration/>



北海道大学環境方針 平成17(2005)年9月5日策定

基本理念 北海道大学は、我が国の学術研究と研究者等の人材養成の中核を担うとともに、21世紀の我が国の「知」の基盤を支える国立大学として、大学におけるあらゆる活動を通じて、地球レベルから地域レベルにわたる環境を守り、持続可能な社会の構築に努める。

北海道大学環境方針の本文については、ウェブサイトをご参照ください。

🌐 https://www.sustainability.hokudai.ac.jp/about/policy/environmental_policy/



北海道大学キャンパスマスタープラン

北海道大学は、大学キャンパスの長期的な将来像を明確にし、施設・環境の整備と運営の具体的な計画を示すため、「北海道大学キャンパスマスタープラン」を策定しています。

北海道大学Climate Action Plan (仮称)

北海道大学では、気候変動対応や生物多様性保全等の持続可能な社会の実現に向けて「北海道大学Climate Action Plan」(仮称)を2025年度中に策定予定です。

北海道大学中期目標・中期計画

ー第4期中期目標(令和4~9年度)SDGsに関する独自目標ー
北海道大学設置の経緯やその発展の歴史を踏まえつつ、美しいキャンパスや広大な研究林等、同大学が保有する物的・知的資産を活用し、また、地方自治体や国内外の大学等と連携を図りながら、持続可能な社会の構築に資する教育、研究、社会連携などを推進することにより、比類なき大学として、SDGsの達成に貢献する。

北海道大学キャンパスマスタープランの本編など詳細については、ウェブサイトをご参照ください。

🌐 <https://www.sustainability.hokudai.ac.jp/about/policy/cmp/>



ガバナンス・コンプライアンスの強化

GRI 2-9, 2-16, 2-18, 2-25, 2-27, 205-2

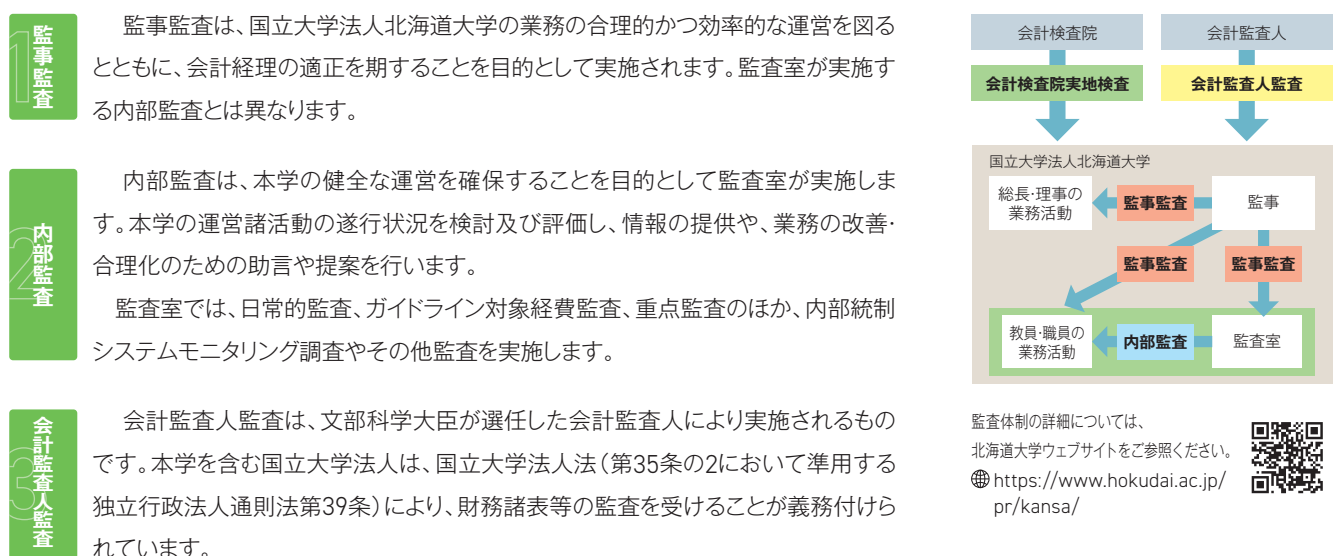


ガバナンス体制

運営組織図



監査体制



国立大学法人ガバナンス・コード

国立大学協会・文部科学省・内閣府が策定した「国立大学法人ガバナンス・コード」の適合状況を点検し、北海道大学ウェブサイトにて公表しております。

🌐 <https://www.hokudai.ac.jp/pr/johokokai/pub/other/>



コンプライアンス

コンプライアンス体制

本学では、「国立大学法人北海道大学コンプライアンス基本規程」においてコンプライアンスに関し基本となる事項を定めており、これに基づいてコンプライアンスの推進等に係る基本的な体制を構築しています。

〈公益通報・コンプライアンス通報に係る通報窓口〉

本学では、「公益通報者保護法」及び「国立大学法人北海道大学コンプライアンス基本規程」に基づき、公益通報及びコンプライアンス通報の通報窓口を設置しております。

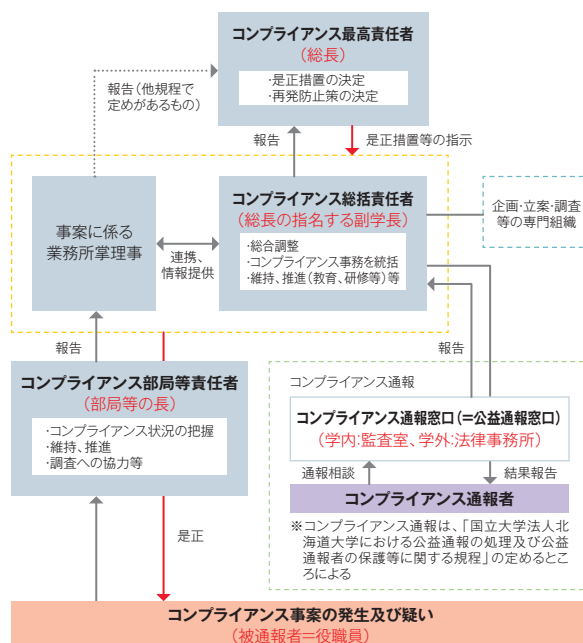
本学において公益通報者保護法の通報対象法律並びにその他の法令、本学の諸規則、教育研究及び診療に係る固有の倫理その他の規範に違反する行為が生じ、又は生じようとしている事実を知った方は、違反する行為が生じていると認める理由及び証拠を明らかにした上で、通報窓口へ通報することができます。

コンプライアンスに関する規定等の詳細については、北海道大学ウェブサイトをご参照ください。

🌐 <https://www.hokudai.ac.jp/pr/johokokai/whistle-blowing/>



コンプライアンスの推進等に係る基本的な体制



研究不正防止管理体制

本学では、文部科学省が制定したガイドラインに基づき、各部局等が研究活動上の不正行為や研究費の不正使用を防止する体制を構築しています。研究活動上の倫理教育、研究費の管理運営とともに部局等の長が実質的な責任と権限を持ち、不正行為・不正使用を防止するための適切な措置を講じています。

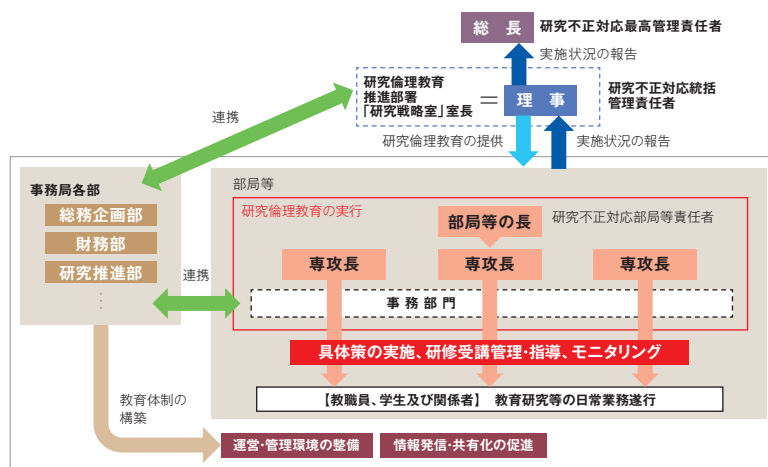
本学における研究活動上の不正行為に関する規程
🌐 https://www.hokudai.ac.jp/jimuk/reiki/reiki_honbun/u010RG00000899.html



本学における研究費の不正使用に関する規程
🌐 https://www.hokudai.ac.jp/jimuk/reiki/reiki_honbun/u010RG00000911.html



例) 研究活動上の不正行為防止管理体制



サステイナブルキャンパスのマネジメント手法

GRI 3-3

インターナショナル・グリーン・ガウン・アワード2019
においてファイナリスト選出時に紐づけされた目標

サステイナブルキャンパス評価システム ASSC

ASSC
Assessment System for Sustainable Campus



サステイナブルキャンパス評価システムASSC (Assessment System for Sustainable Campus/アस्क)は、大学の活動を一般的かつ総体的に捉え、キャンパスのサステナビリティ実現に必要な素地を評価基準として洗い出したアンケート形式の評価システムです。

ASSCの評価は、運営、環境、教育と研究、地域社会の4部門からなり、各部門の下に合計170の評価基準が設けられています。

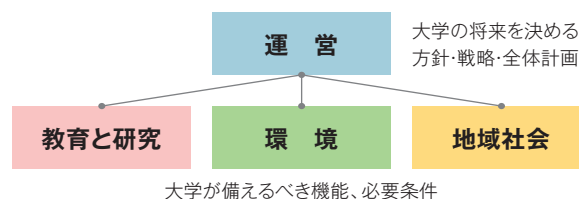
それぞれの大学が持つ得意な点、不得意な点を明らかにし、その結果から、どのような分野に力点を置いて強みを伸ばすのか、また弱みを減らすのか、大学運営の方針が見えてくる仕組みになっています。

ASSCは、2013年に北海道大学が開発し、2014年からは、本学をはじめ国内外の大学でも活用されています。現在は、一般社団法人サステイナブルキャンパス推進協議会(CAS-Net JAPAN)により運営されています(登録校:累計134校、回答提出:累計118校、2025年3月現在)。

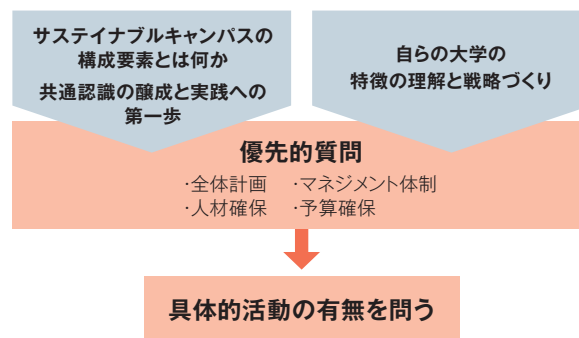
回答した大学には、得点率に応じて、CAS-Net JAPANが、ゴー

ルド、プラチナの認証を行います。これは、サステイナブルキャンパスの達成度の目安となるだけでなく、学内外への成果発信のツールにもなります。

特徴 4部門により評価



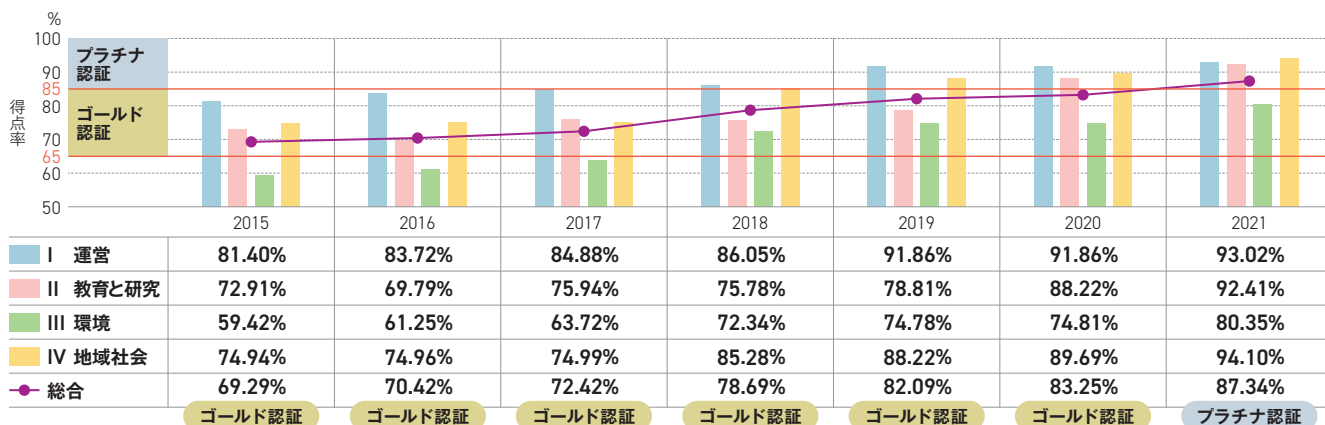
目的



本学のASSC評価の推移

本学ではASSCの評価をPDCAサイクルにおけるCheckに位置づけ、キャンパス運営の継続的な見直し・改善に活用してきました。これまでの活動の積み重ねにより、ASSCの評価は4部門すべてにおいて着実に向上し、2021年度には最上位であるプラチナ認証を獲得しました。次回は、2024年度評価(評価作業は2025年度)を実施予定です。

本学のASSC評価の推移(2015~2021年度)



学外からの評価（THE インパクトランキング、CDP 気候変動質問書）



北海道大学は、サステナビリティに関する活動の透明性と信頼性を高めるため、外部評価制度を積極的に活用しています。

サステナビリティにおける大学の貢献度を示す「Times Higher Education (THE) インパクトランキング2025」においては、総合ランキングで世界2,318大学中、世界同率44位となり、6年連続で国内1位を獲得しました。

グローバルな環境情報開示システムを運営するCDPによる「CDP気候変動質問書2024」においては、3年連続で「B」スコア（マネジメントレベル）を獲得しています。

これらの評価は、国際的な比較を通じて本学の取り組みの強みと課題を明確にする契機となっています。今後も、外部評価を活用しながら、より積極的な情報開示と社会的責任の遂行に努めてまいります。

本学の外部評価の推移（2019～2025年度）

THE インパクトランキング	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
総合スコア	64.6-75.6	85.3	77.5-85.2	96.2	93.9	90.6	92.7
世界順位	101-200th	76th	101-200th	10th	22nd	=72nd	=44th
国内順位	=4th	1st	=1st	1st	1st	1st	1st
対象大学数（総合ランキング）	467	768	1,117	1,410	1,591	1,963	2,318

CDP 気候変動質問書	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
ランク	-	-	-	B	B	B	（評価中）
回答組織数（世界）	8,361	9,526	13,126	18,636	23,200	24,836	（評価中）

※本学は、2022年度より自主回答を開始

ステークホルダー・エンゲージメント

GRI 2-26, 2-29



学外のステークホルダーからの意見

本学の業務の成果を最大化できる経営を実現するため、多様な関係者の幅広い意見を聴く「経営協議会」を年4回開催し、その知見を積極的に法人経営に反映させています。

【2024年度経営協議会 会議開催状況】

<https://www.hokudai.ac.jp/introduction/gov/committee/committeeR6/keieikyougikai.html>



第2回経営協議会（2024年9月11日開催）

「北海道大学サステナビリティ宣言の策定」への主な意見

- 実施するならペットボトル削減等のアクションプランを具体化していくべきである。
- 大学内部の意識改革には非常に良い宣言である。
- 現状では大学内でこの宣言が知られていない可能性が高く、学生も認識していないと思われる。中身のある宣言を社会に広め、北大が先頭に立って教育や人材輩出を通じて課題解決に取り組むことで、変革が可能になると考える。

第3回経営協議会（2025年1月17日開催）

「北海道大学GHGインベントリ2022の策定」への主な意見

- 高等教育機関においては、教育面では学生に徹底的に環境の重要性を認識させること、研究面では環境問題改善に寄与するイノベティブな研究に戦略的に取り組むことが重要である。
- 企業の多くがScope3の対応に苦労している状況の中で、Scope1・2・3を網羅したGHGインベントリを策定したことは非常に素晴らしい成果である。

サステナビリティに関する学内連携の体制

全学的にサステナビリティを推進するため、全部局等にサステナビリティ推進員及び同補佐を委嘱し、年2回開催する「サステナビリティ推進員会議」にて学内の環境課題について対応策を共有し、実行を図っています。

第1回会議の主な内容（2024年7月24日オンライン開催）

- 2024年度夏季の省エネルギー対策について
- 中央ローン・農学部ローン及びエルムの森の緑地の利用について
- 2023年度札幌キャンパスにおけるエコノクックス調査報告と予防について
- ニセアカシア、ニワウルシの駆除について
- 「北海道大学×SDGs」及び「デジタルサイネージ」への情報提供のお願い
- 「北海道大学SDGsスタートアップガイドブック2024」の公開について

第2回会議の主な内容（2024年12月17日オンライン開催）

- 北海道大学サステナビリティ宣言の策定について
- 2024年度冬季の省エネルギー対策について
- 北海道大学GHGインベントリ2022策定について
- ごみの適正な分別について
- 出張FD・SDについて
- 「北海道大学×SDGs」への情報提供について

サステナビリティ活動

GRI 2-24, 203-1, 203-2, 404-2



「HU VISION 2030～持続可能性の追求」の取り組み

本学は2030年をターゲットイヤーとする中期的ビジョン「HU VISION 2030」(P07参照)を策定しています。その基本的方針の8つの観点の1つである「持続可能性の追求」に関連し、サステナビリティ推進機構では以下の取り組みを行いました。

「持続可能性の追求」：北海道大学は、広大で豊かなフィールドをもとに形作られたキャンパス環境を基盤とした物的・知的資産を最大限に活用し、教育・研究・社会との共創を通じて「持続可能な社会」を実現する社会変革を先導する。

主な構想	成 果
持続可能な社会の構築に向けた本学の取組に関する情報の集約・発信力を更に向上させ、価値観を共有した国内外のステークホルダーとの連携を強化するとともに、キャンパス内での諸活動の継続的・多面的な検証を通じて、社会への効果的な還元に繋げる。	● 本学のSDGs情報サイト「北海道大学×SDGs」を2020年から運用 ● 「留萌管内高等学校・北海道大学SDGs・ゼロカーボンプロジェクト」のプレワークショップを実施 ● 北海道マラソン2024において「きたみてガーデンSDGs農園」プロジェクトを実施 ● 日本陸上競技連盟「アスレティックス・アワード2024」表彰式で「BEST THINK 賞」を受賞 ▶P14 ● 「環境広場さっぽろ2024」において、ステージ発表とブース展示を実施 ● 「北海道大学×HBC SDGs大学 育つ森の不思議 in JT の森 積丹」を開催 ● 官学連携「カーボンニュートラル夏季短期学習プログラム」を開催 ▶P20 ● 国際会議「GLOBAL SUSTAINABLE DEVELOPMENT CONGRESS」に参加、セッションに登壇 ● 「NoMaps 2024」WELLNESSに参加、ブース出展 ● ウェルネス推進プロジェクト「H-ARTs」で「無料で健康チェック!」を実施 ▶P15 ● 北海道大学×STV「SDGsデー2024」を開催 ● 「エコプロ2024」に出展 ● 「サイエンスフェスタ2024」で「みらい創造」ワークショップを開催 ● 学生向けシンポジウム「北海道のGXと経済をつなぐ未来とは」を開催 ▶P27 ● 「第20回世界冬の都市市長会議」において講演 ● 「SDGs 北海道セミナー2025」を開催 ● 「北海道大学×日本証券業協会 SDGsシンポジウム」に横田理事・副学長が登壇 ▶P33 ● 「一般社団法人サステナブルキャンパス推進協議会(CAS-Net JAPAN) 社員総会・講演会」にて、横田理事・副学長が登壇 ● 「第8回道総研オープンフォーラム」に横田理事・副学長が登壇 ● クイーンズ大学副プロボストが来学、横田理事・副学長等とサステナビリティに関する意見交換を実施 ● 国際連合訓練調査研究所(ユニタール)が本学を表敬訪問、特別講演会を実施 ● 総合博物館令和6年度夏季企画展「北大の探求心2024」で本学のSDGs活動を紹介 ● 国土交通省都市局・北海道開発局主催「まちづくりGXセミナーin札幌～都市の未来が緑で変わる～」に登壇 ● 「HBC赤れんがプレミアムフェスト」において、ステージイベント「北大病院PHC presents～おいしく食べて予防医療!MIND食とは～」を実施
持続可能な社会の創り手を育成するため、SDGsの基礎を体系的に学修し、その展開力を身に付けるための教育を推進する。	● 学部1年生向け導入科目「北大での学び」において、講義「世界的な課題を知る」を2023年度より提供 ▶P15 ● 全学教育科目及び大学院共通授業科目とSDGsの関連を調査、公開 ● 官学連携「カーボンニュートラル夏季短期学習プログラム」を開催 ▶P20 ● オープンキャンパス2024で、SDGsゲームとSDGsの講義を実施 ● Hokkaido Summer Institute科目「国際SDGs入門」を開講 ● Hokkaido Summer Institute科目「北大フィールドサマースクール」を開講 ● 「システミックデザイン体験 1day Boot Camp プログラム」を開催 ● 「地域課題解決アイデアソン case of 北海道大学×三井物産「サス学」」を開催 ● 「未来志向ワークショップ 脱炭素と持続可能なエネルギー」を実施 ▶P21
本学のキャンパスやフィールド資源を、社会の課題解決に向けた実証の場となるリビングラボラトリとして活用し、省エネ・創エネと施設的环境性能向上や生物多様性の保全に向けた取組を通じて脱炭素社会の実現を図り、持続可能な発展に寄与する研究成果を世界に発信し貢献する。	● 脱炭素先行地域に選定 ● 函館キャンパス水産科学未来人材育成館のZEB化 ● 「北海道大学GHGインベントリ2022」の策定 ▶P04、27 ● 雨龍研究林、札幌キャンパスがOECM国際データベースに登録 ▶P03 ● 北大生協北部食堂に「浄水型ウォータースタンド」を試験設置 ▶P15 ● 北海道大学と東京大学が連携協定を締結 一森林等の自然資本を中心としたグリーントランスフォーメーション推進 ▶P17 ● グリーントランスフォーメーション先導研究センターが活動開始 ▶P16 ● リニューアルエネルギーリサーチ&エデュケーションセンター(REREC)を新設 ▶P17
SDGsの達成に貢献するイノベーション・コモンズ(共創拠点)の実現に向け、建設資源の有効利用にも配慮したキャンパスマスタープランを策定し、これに基づく施設の整備や長寿命化を進めることで、歴史的建造物やランドスケープを継承・活用しつつ、全ての大学構成員のWell-beingの実現や生産性の向上を志向した、持続可能で周辺環境と調和したキャンパスを構築する。	● 札幌北キャンパスにおける新たな屋外空間の整備 ▶P16 ● 「インフラ長寿命化計画(行動計画)」改定 ▶P33 ● 「サステナブルキャンパス賞2024」受賞 ▶P16 ● 雨龍研究林、札幌キャンパスがOECM国際データベースに登録 ▶P03 ● 植物園を一般公開。地域の自然環境の変遷を紹介
本学の構成員一人一人が矜持と尊厳を持って活動し、自らの可能性への挑戦を通じて個々の能力を最大限発揮することができるよう、「SDGs」を共通言語とした一体感の醸成と倫理観の浸透に向けてあらゆる機会を提供し、大学としての総合力を向上させる。	● 「北海道大学サステナビリティ宣言」を策定 ▶P03、14 ● 出張FD・SD「北海道大学サステナビリティ宣言と教育研究活動」を実施 ▶P36 ● 「北海道大学SDGsスタートアップガイドブック2024」を作成、教職員に周知

「北海道大学サステナビリティ宣言」の実現を通じて目指す姿



2024年8月に策定した「北海道大学サステナビリティ宣言」では、全ての構成員に対して、各自が矜持と尊厳をもって活動することを通じて、自らの可能性へ挑戦するなど個々の能力を最大限に発揮することができる環境を整えることにより、サステナビリティ等を共通言語とした学内エンゲージメント（一体感）の醸成を図ること、また、こうした本学の活動の変化が、対外的にも本学

の社会における存在意義を高め、学外エンゲージメント（共感）が醸成されること、その結果として本学は社会的インパクトを一層高め、「持続可能なWell-being社会」を実現する社会変革を先導していくことを掲げています。

また、本宣言の実現を通じて、本学は以下の4つの姿を目指しています。

ウィリアム S. クラーク博士の“lofty ambition”（高邁なる大志）の精神を背景に持つ大学として、活気に満ち、健康的で、信頼され、さまざまなステークホルダーと深く関わり互いに尊重し合い、すべての構成員が一体感をもって課題に立ち向かい、学際性、リーダーシップを育み強化し、多様で包括的なサステナビリティのキャンパス文化を創造する大学

本学が活動する多くの土地が、元々先住民族（アイヌ）の方々が日々の暮らしに利用していた場所であり、先住民族の歴史を背景に持つ環境の中で教育・研究活動を行っているという共通認識を持ち、文化的多様性の回復を追求し続ける大学

基本理念の中に「全人教育」と「国際性の涵養」を標榜する大学として、サステナビリティに関する世界的ネットワークをリードし、サステナビリティに関する学問を発展させ、地域でサステナビリティの実践を成功させ、サステナビリティの知識とスキルを身につけた学生を育成し、持続可能な社会の実現を推進する次世代人材を社会に輩出し続ける大学

基本理念の中に「実学の重視」を標榜する大学として、国の掲げる温室効果ガス削減目標を達成するとともに、必要な財源確保に努めつつ、水消費の削減、廃棄物や食品ロスの削減、プラスチック使用量の削減、環境負荷の少ない通勤・通学方法の選択、構内交通体系の最適化など、キャンパスライフの環境負荷を最小化するための取組や構成員の行動変容を通じ、気候変動対応や生物多様性保全等の持続可能な社会の実現に向けて、公正かつ公平な移行を加速化する大学

「北海道大学サステナビリティ宣言」については、ウェブサイトをご参照ください。

<https://www.sustainability.hokudai.ac.jp/repository/declaration/>



北海道マラソン2024におけるSDGsの取り組みが「アスレティックス・アワード2024」で最高賞を受賞



北海道マラソン2024における北海道大学他の取り組みに対して、2024年12月、日本陸上競技連盟から、陸上競技界でのSDGsに関する取り組みを評価する「BEST THINK賞」を受賞しました。本賞は、日本陸上競技連盟が陸上を通して社会貢献を目指すSDGsプロジェクト「#LETSTHINK」における最高賞です。

サステナビリティ推進機構と北海道マラソン2024組織委員会は、本学総合博物館学生ボランティアグループ「きたみてガーデン」と協働で、札幌キャンパスで回収された落ち葉からできた腐葉土を利活用し、総合博物館の中庭で野菜を栽培する「きたみてガーデンSDGs農園」プロジェクトを実施しました。収穫した野菜は「ミュージアムカフェばらす」がオリジナルメニューとして一般来館者に提供したほか、北海道マラソン2024前日の

カーボローディングパーティーで154名のランナーに提供されました。また、本学の跨道橋撤去工事に際してやむを得ず伐採された木材を、マラソンの折り返し地点のモニュメント（エゾシカ）に利用しました。



授与された橋を持つ林 忠一連携URA（左から3人目）、松山元樹サステナビリティ推進機構特定専門職員（右端）

ウェルネス推進プロジェクト「H-ARTs (ハーツ)」を実施



本学と株式会社アークス、株式会社ラルズ、株式会社ツルハ及び札幌市が連携し、健康で持続可能な地域社会づくりへの貢献を目指すプロジェクト「H-ARTs (ハーツ)」を展開しています。2024年度は、5月・8月・10月・3月に、「無料で健康チェック!」を開催し、参加者に「骨健康度測定」「脳年齢測定」及び推定野菜摂取量が測定できる「ベジチェック®」等を実施し、高齢者生活の相談窓口を設ける等しました。5月実施回においては、NPO法人グッドドライバー・レッスンの協力のもと「グッドドライバー・チェック」を実施し、参加者らは安全に運転するためのセルフチェックやアクセルとブレーキの踏み間違い防止体操等を体験・学習しました。本イベントでは、本学及び周辺大学の学生が運営スタッフとして参加しており、地域の健康づくりに関心が高い学生等のボランティア活動の機会にもなっています。



「無料で健康チェック!」の様子



「グッドドライバー・チェック」の様子

北大生協北部食堂に「浄水型ウォータースタンド」を試験設置



サステナビリティ推進機構及び北海道大学生協同組合（以下、北大生協）は、北大生協北部食堂に「浄水型ウォータースタンド」を試験設置しました。設置した浄水型ウォータースタンドは水道水栓直結型で、ナノトラップフィルターを通すことで、ミネラルはそのままに、水本来のおいしさを味わうことができます。

本学の学生・教職員だけでなく、一般市民の方々もご持参いただいたマイボトルに直接給水できます。マイボトルの普及を促進することで安全で清潔な飲料水を提供すると同時に、プラスチックごみの削減や二酸化炭素排出量の低減などにも貢献します。

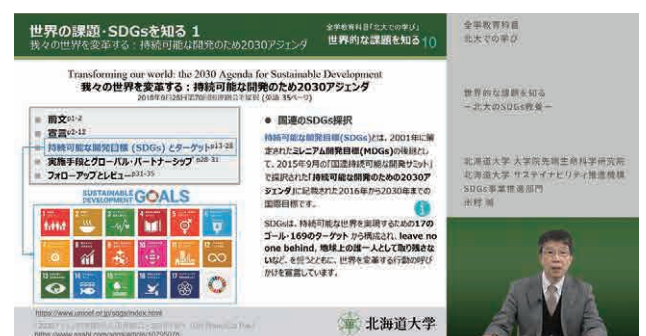


北大生協北部食堂に設置したウォータースタンド

学部学生及び大学院生へのSDGs人材育成



世界や地域の課題解決に資する持続可能な社会の創り手を育成するために、SDGsの基礎を体系的に理解し、社会の課題解決に向けて具体的な取り組みを提案するための知識を身につけられる授業として、2023年度から学部1年生の必修科目である全学教育科目「北大での学び」において、「世界的な課題を知る（北大SDGs概要）」の講義を実施。2024年度は2,614名が受講しています。2024度からは大学院共通授業科目「北大大学院での学び」において受講必須科目（デジタルバッジ修了証明）として開講しました。同年度は2,048名が受講し、SDGsの視点を取り入れた学びの機会を提供し、持続可能な社会の実現に向けた意識の醸成を図っています。



学部学生向けの講義「世界的な課題を知る（北大SDGs概要）」

札幌北キャンパスにおける新たな屋外空間の整備



2022年度よりサステナビリティ推進機構及び施設部が中心となって、札幌北キャンパスの創成科学研究棟、北キャンパス総合研究棟5号館・8号館の3つの建物に囲まれた約1.2haの土地の屋外空間整備を進めています。2024年12月に造園工事が完了、建物と広場の往来を促す建物建具の改修や、広場に面した建物エントランス部分にスロープを設置する工事を経て、2025年秋に完成予定です。

教職員・学生・関係者の居場所、交流の場、ワークスペース、実証実験等のフィールドとなり、新たな価値観を生み出す場として活用していきます。



2024年11月に完成したカバードウォーク

「北海道ワイン教育研究センター棟改修」及び「自然共生サイト認定・OECD登録に関する取り組み」が「サステナブルキャンパス賞2024」を受賞



一般社団法人サステナブルキャンパス推進協議会 (CAS-Net JAPAN) が主催する「サステナブルキャンパス賞2024」にて、本学の「北海道ワイン教育研究センター棟改修」及び「自然共生サイト*認定・OECD登録に関する取り組み」が表彰されました。

建築・設備部門で大賞を受賞した「北海道ワイン教育研究センター棟改修」は、札幌キャンパス最古の建物・旧昆虫学及養蚕学教室をワインの教育・研究拠点として再生した取り組みで、歴史的建造物の持続可能な保全モデルになり得ると評価されました。

大学運営・地域連携部門で奨励賞受賞の「自然共生サイト認定・OECD登録」は、大学キャンパスにおける生物多様性保全

を目的に進めている先導的・模範的な取り組みが高く評価されています。

※自然共生サイト … 民間の取組によって生物多様性の保全が図られている区域を国（環境大臣）が認定した区域。



サステナブルキャンパス賞の受賞（左から）小澤丈夫総長補佐（当時）、横田 篤理事、副学長、朴 恵淑一般社団法人サステナブルキャンパス推進協議会代表理事



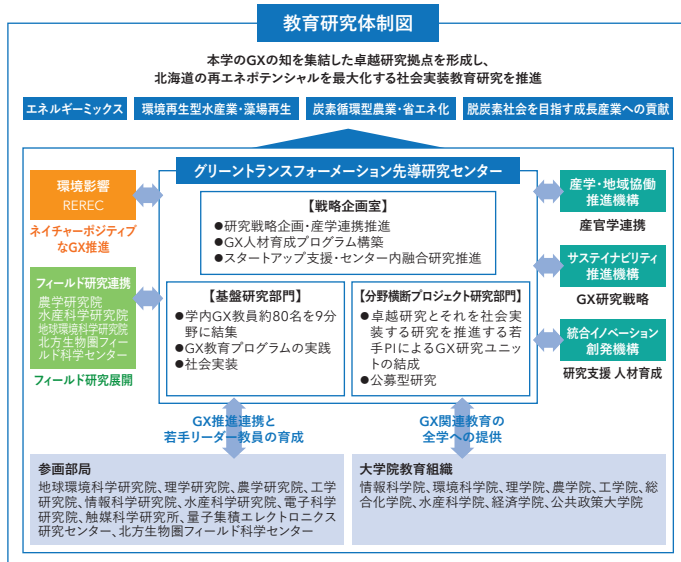
奨励賞受賞の様子（左から）北岡真吾サステナビリティ推進機構特任准教授、愛甲哲也総長補佐、横田 篤理事、副学長、朴 恵淑代表理事

「グリーントランスフォーメーション先導研究センター」が活動開始



本学は、2025年4月1日付で共同プロジェクト拠点「グリーントランスフォーメーション（GX）先導研究センター」を設置。GX産業の集積と北海道における知のGX拠点としての活動を始めました。

本センターでは、エネルギー・地球環境に関する総合科学を進展させ、GX教育研究拠点として卓越研究の推進、産学官連携プラットフォームの構築、次世代GX人材の育成を行い、気候変動を抑制し、持続可能な社会の構築に不可欠なカーボンニュートラルの実現に貢献することを目的としています。将来的には「北海道GXコンソーシアム」を立ち上げ、北海道から世界に発信する世界的GX拠点へと発展することを目指します。



ネイチャーポジティブと地域社会ポジティブを 両立させる共同プロジェクト拠点「REREC」

本学は、再生可能エネルギー技術の研究と人材育成の拠点「リニューアブルエナジーリサーチ＆エデュケーションセンター（Renewable Energy Research & Education Center：REREC／リレック、センター長：北方生物圏フィールド科学センター長 宮下和士 教授）」を2024年6月より5年間の期間で新設しました。本センターでは、再生可能エネルギー活用に関する企画開発、環境影響評価、設置・運用・管理・撤去までのライフサイクルを俯瞰した研究を推進するとともに、地元との合意形成能力を持ち、「ネイチャーポジティブ」と「地域社会ポジティブ」のバランスの取れた課題解決力を持つ人材の輩出、地域への利益の還元と自然資本の持続可能な活用を目指します。

ネイチャー ポジティブ&地域社会ポジティブの実現による
持続可能な再生可能エネルギー



東京大学とGX推進に向けた連携協定の締結

2024年11月、本学は、東京大学と森林等の自然資本*を中心としたグリーントランスフォーメーション（GX）の推進に向けた連携協定を締結しました。この協定は、日本最大規模の森林を保有する両大学が、森林等の自然資本を中心に、持続可能な社会を実現するため、普遍的課題であるカーボンニュートラル、ネイチャーポジティブ及びサーキュラーエコノミー等、GXを推進することを目的としています。今後は、人材交流を含めた学術研究の推進と、研究成果の社会実装、アウトリーチ活動や気候リテラシー教育の推進等で連携を図ります。

*自然資本：森林、土壌、水、大気、生物資源等、自然によって形成される資本（ストック）のこと。自然資本の価値を適切に評価・管理していくことが、国民の生活を安定させ、企業等の経営の持続可能性を高めることにつながると考えられる。



東京大学の久保保也総長特別参与（左）と横田 篤理事・副学長（右）

構内バスを利用して自動運転システムの開発・実証に貢献

本学、北海道電力株式会社及び公益財団法人北海道科学技術総合振興センターの3者で進めている本学のキャンパスをフィールドとした社会課題解決モデルである「北大イノベーション・commons構想」は、エネルギーの低炭素化と災害レジリエンスが共存する「エネルギーレイク」に循環型社会に対応するための新たな経済基盤となる「キャンパス循環モデル」を組み込んだ複合的取り組みです。交通に関するモデルでは、構内循環バスの脱炭素化（EV化）等を検討してきました。

2024年度は、積雪寒冷地での自動運転技術の確立に向けて、工学研究院の高橋 翔准教授が研究を進めている視界不良時においても、その視界状況や路面、堆雪等の道路状況の正確な評価を可能とする北大モニタリングシステムのフィールド実証を推進。2024年11月から、北大構内循環バス2台（現行、自動運転ではない）に北大モニタリングシステムを搭載し、秋季・冬季をととして、道路状況の画像解析を実施しました。



札幌キャンパス内を走行する構内循環バス

採択・認定・プロジェクト

GRI 2-24, 2-28, 203-2, 413-1

J-PEAKS キックオフシンポジウムを開催

2024年7月25日、地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）キックオフシンポジウムが札幌キャンパスで行われました。本学は、2023年度に「フィールドサイエンスを基盤とした地球環境を再生する新たな持続的食料生産システムの構築と展開」を提案し、J-PEAKSに採択されています。資金清博総長が、本事業に採択された12校の1つとして取り組む決意と、「その中でもリードして注目されるような立場で進めていきたい」と意気込みを語りました。パネルディスカッションでは、酪農や水産業、行政、企業など様々な立場のパネリストが参加し、未来の農水産業に対する多様な意見が交わされました。

また、2025年2月6日には、伴走チームによるサイトビジット

が実施され、J-PEAKSの中核となる研究拠点等の視察と、総長をはじめとした本学執行部との意見交換が行われました。



議論をその場で図解するリアルタイムグラフィックレコーディングを取り入れたパネルディスカッション

半導体複合拠点の実現を目指す事業が 地方大学・地域産業創生交付金に採択

北海道では、Rapidus株式会社の立地を契機として、北海道に半導体の製造、研究、人材育成が一体となった複合拠点の実現を目指す様々な取り組みが実施されています。その中核的な事業として、「次世代半導体をトリガーとした半導体の複合拠点の実現と地域経済の活性化」事業について、本学の資金清博総長を事業責任者として、北海道、札幌市及び千歳市が共同で

方大学・地域産業創生交付金の申請を行い、採択されました。

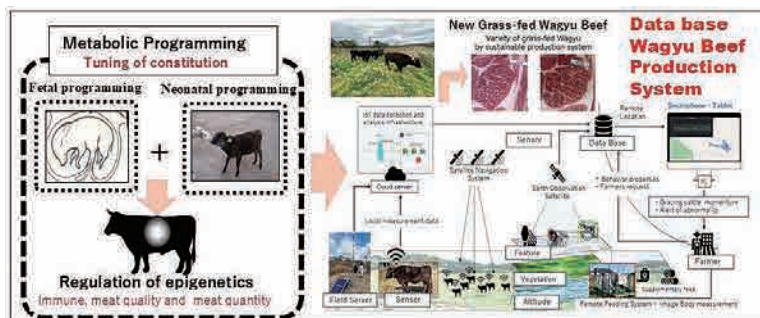
本事業において本学は、①人材育成、②教育研究拠点整備、③研究開発の3つの事業を柱に、Rapidus社と密接に連携しつつ、半導体人材育成体制の強化と半導体企業との先端研究を一体的に推進します。

「次世代和牛生産システム構築拠点」がCOI-NEXTに採択

本学が代表機関となり、幹事自治体の白老町、幹事機関の株式会社敷島ファームとともに提案した「次世代和牛生産システム構築拠点」（プロジェクトリーダー：北方生物圏フィールド科学センター 後藤貴文教授）が2024年10月、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）による「共創の場形成支援プログラム（COI-NEXT）地域共創分野育成型」に採択されました。

本拠点は、「スマート放牧管理でZ世代が導く革新的な地域社会の実現」をビジョンに掲げ、食料生産を基盤とした人が集まる地域社会とその発展を目指すものです。Z世代が中心となり、スマートフォンを活用

した放牧管理等で、農業者が未来に希望を持てる畜産業の構造改革を推進します。



代謝プログラミングによりウシの体質を改善し、スマホを利用したスマート放牧牛飼養システムを構築。環境や景観を守りつつ、地域社会の発展とビジネスとして成立する農業モデルの確立を目指す

研究

GRI 2-24

グリーンランドで氷河流動変化のメカニズムを解明

低温科学研究所・北極域研究センターの杉山慎教授、エブゲニ・ボドリスキ准教授らの研究グループは、国立極地研究所、スウェーデン連邦工科大学と共同で、北極グリーンランドで6年間にわたる野外観測を実施し、海に流れ込む氷河（カーピング氷河）の流動変化を調べました。

氷河の末端近くで氷の動きを精密に測定した結果、気温、雨、潮の満ち引きと、氷河の流れる速度との関係が明らかになりました。今回の発見を数値モデルに適用することによって、氷河変動と海水準上昇のより正確な予測への貢献が期待されます。



グリーンランド氷床から海に流れ込むボードイン氷河（氷河の幅は約3キロメートル）

カーボンニュートラル達成のための鉱物風化促進技術

カーボンニュートラル達成への新技術として、大気から二酸化炭素を除去して固定化するネガティブエミッション技術（Negative Emission Technologies：NETs）が注目を集めています。工学研究院の佐藤 努教授は、国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）のムーンショット型研究開発事業「岩石と場の特性を活用した風化促進技術“A-ERW”※1の開発」に参画し、岩石の風化促進によるCO₂固定化技術の開発に取り組んでいます。

新技術A-ERWは、適用地域の土地に適した方法で風化促進を行うことで、①大気中のCO₂を除去、②地域に資源循環・コベネフィットをもたらす、の双方を同時に実現することが可能になると期待されています。

※1 A-ERW：Advanced Enhanced Rock Weatheringの略。“A”には、Accelerated、Active、Agro-industrial、Advantageous、Accurate Accountingの意味を含ませている。

NEDOムーンショット目標4《温室効果ガス》地質を活用！風化の力でCO₂削減／中垣隆雄（早稲田大学）岩石と場の特性を活用した風化促進技術“A-ERW”の開発
https://www.youtube.com/watch?v=A1Dqqm89J_8&list=PLZH3AKTCrVsW02NDqRxLnSvVc5zqVDFAT



地下水の汚染とサケ稚魚の成育との関連性を解明

地球環境科学研究院の根岸淳二郎教授と札幌市豊平川さけ科学館の研究グループは、石狩川水系豊平川中流において河床から湧出する地下水の水質・水温を観測し、サケ（シロザケ）産卵床への影響を解析しました。その結果、冬季に形成される豊平

川のサケ産卵床の多くは湧出地下水の影響を受けており、サケ稚魚の成育に何らかの阻害効果を有する物質が地下水に含まれている可能性が高いと考えられました。本研究の成果により、より良い都市河川の環境管理に一步近づくことが期待されます。

第9回全球エネルギー水循環プロジェクト国際会議を開催

全球エネルギー水循環プロジェクト（GEWEX）は、国際学術会議（ISC）、世界気象機関（WMO）、ユネスコ政府間海洋学委員会（IOC-UNESCO）が共同出資している世界気候研究計画（WCRP）が進める中核プログラムの一つです。2024年7月、「第

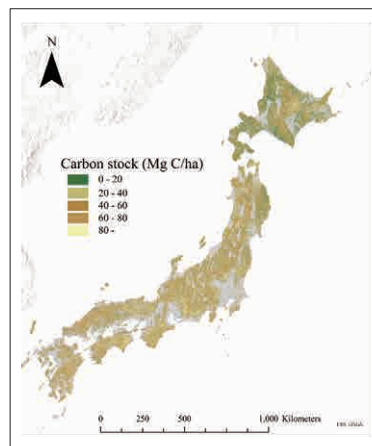
9回全球エネルギー水循環プロジェクト国際会議」が日本で初めて札幌で開催され、過去最高の約1,300名が45カ国から参加しました。本学は本会議の共催を務めており、工学研究院の山田朋人教授が札幌実行委員会委員長を務めました。

日本全土の高解像度森林炭素蓄積量マップ作成に成功



農学研究院の加藤知教授の研究グループと、東京大学大学院農学生命科学研究科、宇宙航空研究開発機構（JAXA）、米国ジョージメイソン大学の研究グループは、日本全国の森林地上部炭素蓄積量（＝バイオマス）マップの作成に成功しました。人工衛星 PALSAR-2（JAXA だいち2号に搭載）、Sentinel2（欧州宇宙機関）等によるデータを入力に利用し、世界でも稀に見る高解像度（1ピクセルあたり10m×10m）での我が国の森林地上部バイオマスマップを作成。本研究は、J-クレジット※2等の炭素取引において、小規模な自治体・企業・個人の所有する森林に対して、無料に近い形で炭素クレジット計算を行う仕組みの構築に貢献することにつながります。

※2 J-クレジット：環境省、経済産業省、農林水産省が運営するベースライン&クレジット制度。省エネ・再エネ設備の導入や森林管理等による温室効果ガスの排出削減・吸収量を認証する。



高解像度（1ピクセルあたり10m×10m）の森林地上部炭素蓄積量（Mg 炭素/ha）

世界で初めてアマモ場の供給サービスを空間的に評価



北方生物圏フィールド科学センターの宮下和士教授らの研究グループは、北海道立総合研究機構釧路水産試験場、東京農業大学生物産業学部、水産研究・教育機構、西網走漁業協同組合との共同研究により、世界で初めてアマモ場の供給サービス※3を空間的に評価しました。アマモ場は、世界の沿岸に広く分布する海草藻場であり、二酸化炭素の吸収や生き物への生息地の提供等、人間に多くの利益をもたらします。研究グループは、2015年7～8月に北海道網走市の能取湖で、アマモ場とホッカイエビの空間的な関係を解析し、生態系サービスの一つである供給サービスを定量化しました。

※3 生態系が直接的に人間にもたらす物質的な利益。

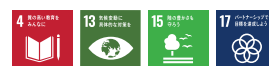


能取湖の広大なアマモ場。二酸化炭素の吸収・貯留、生き物への生息地の提供、水質浄化等の機能を持ち、豊かな生態系を築くことで、沿岸の地域社会に多大な貢献をしている

教育

GRI 2-24, 404-2

官学連携「カーボンニュートラル夏季短期学習プログラム」を開催



サステナビリティ推進機構SDGs事業推進部門は、札幌市、上川郡下川町、法政大学及び関西大学と連携し、2024年8月28日、9月4日～6日、17日に「カーボンニュートラル夏季短期学習プログラム」を実施。3大学から学部生・大学院生合わせて30名（本学6名）が参加し、エネルギー関連施設の見学等のフィールドワーク、脱炭素に向けた各地方公共団体、各企業の取り組みについての講義を受けました。最終日には、オンラインでグループワークを行い、行政、エネルギー供給事業者、エネルギー活用事業者、生活者の視点から、カーボンニュートラル実現に向けたトランジションについての発表会を行いました。



総合博物館での札幌市による講義の様子

「未来志向ワークショップ 脱炭素と持続可能なエネルギー」を実施



本学教養深化プログラム、サステナビリティ推進機構、広報・社会連携本部社会連携部門及び札幌市環境局は共催で、「未来志向ワークショップ 脱炭素と持続可能なエネルギー」を2024年8月28日、9月3日、4日に実施しました。本ワークショップは、脱炭素と持続可能なエネルギーについて、札幌市の取り組みを学びながら、様々な専門性を持つ学生たちの知見を融合させることで、新しいアプローチやアクションと一緒に考えることを目的としています。8月28日のキックオフイベントには13名、9月3日、4日のワークショップには7名の大学院生が参加しました。



ディスカッションの様子

学生活動

GRI 2-24

「除染土処分に関するワークショップ」北海道班が活動を報告



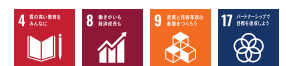
2024年9月、福島大学及び環境省環境再生資源循環局は、サステナビリティ推進機構等の協力を得て、全国の大学生を対象に「除染土処分に関する学生ワークショップ」を開催しました。本学大学生・大学院生5名がワークショップに参加し、現地での施設見学、環境省や大熊町役場職員による講義、「除染土の問題に対してできること」を話し合うグループワークなどを行いました。

ワークショップ後は、本学と公立はこだて未来大学からの参加学生等で主体的に「北海道班」を結成し、12月に札幌駅前通地下広場（チ・カ・ホ）で開催された「北海道大学サイエンスフェスタ2024」に出展し、復興の現状や除染土処分問題についてのパネルを展示するなどし、一般市民への理解を呼びかけました。

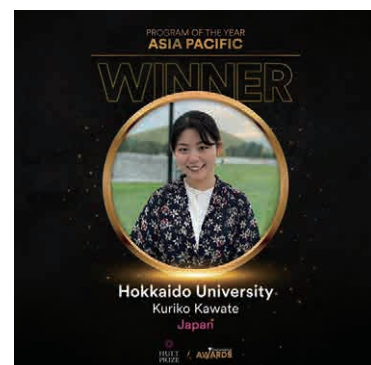


チ・カ・ホでのパネル展示の様子

ハルトプライズ運営委員会が「2024 OnCampus Awards Program of the Year in Asia Pacific」に選出



Hult Prize（ハルトプライズ）は、ハルトプライズ財団が主催する世界最大級の学生による社会起業アイデアコンペです。本学では、学生らが主体となる「ハルトプライズ運営委員会」が、「北海道大学 Hult Prize 学内大会」を毎年開催しています。大会運営にあたっては、北海道の複数企業のスポンサーによるサポートを獲得しており、2023-24年大会では、北海道・北海道経済産業局・札幌市の3行政を含め、産学官がオール北海道体制でスタートアップを支援する「STARTUP HOKKAIDO」が実施した国際カンファレンス「Hokkaido Innovation Week」とコラボレーションを果たしました。こうした活動が評価され、2024年に、Hult Prizeの学生運営委員会の世界No.1を決める「On Campus Awards」において、アジア・パシフィック地域で1位、世界TOP7入りの快挙を果たしました。



本学ハルトプライズ運営委員会委員長（2023-25）川手紅梨子さん

環境

環境への取り組み

GRI 301-1, 302-1, 303-3, 303-4, 303-5, 305-1, 305-2, 305-3, 305-4, 305-5, 305-7, 306-1

マテリアルバランス



マテリアルバランスとは、事業活動におけるエネルギー及び資源の投入量（インプット）と、その活動に伴って発生した製品及び環境負荷物質（アウトプット）の全体像を表したものです。本学では、事業活動全体を通じて発生する環境負荷を定量的に把握し、削減に取り組むとともに適正管理に努めています。

マテリアルバランス（2024年度） ※1[札幌]：札幌キャンパス、[函館]：函館キャンパス

インプット



一次エネルギー

・電力	1,062,426GJ
・都市ガス	494,865GJ
・重油	39,484GJ
・その他	15,269GJ



事務用品

・紙	467t
・グリーン購入品目	196品目



化学物質取扱量

・PRTR法に基づく化学物質	33,787kg
----------------	----------



水

・市水	174,723m ³	([札幌] 142,474m ³ + [函館] 32,249m ³)
・井水	743,266m ³	([札幌] 522,514m ³ + [函館] 220,752m ³)

アウトプット



温室効果ガス

・Scope1	29,291t-CO ₂ e
・Scope2	65,803t-CO ₂ e
・Scope3	177,225t-CO ₂ e ※2 (2022年度実績値)



廃棄物等

・一般廃棄物	8,809m ³	([札幌] 8,327m ³ + [函館] 482m ³) [札幌]内訳：一般ごみ5,126m ³ /資源化ごみ355m ³ / 生ごみ213m ³ /びん・缶・ペットボトル2,632m ³ [函館]内訳：一般廃棄物482m ³
・古紙	467t	([札幌] 451t+ [函館] 17t)
・産業廃棄物(感染性廃棄物を除く)	1,733t	([札幌] 1,713t+ [函館] 20t)
・感染性廃棄物	355t	([札幌] 355t+ [函館] 0.02t)



実験廃液

・有機廃液	113,847L	([札幌] 107,751L+ [函館] 6,096L)
・無機廃液	16,878L	([札幌] 16,450L+ [函館] 428L)

※1 一次エネルギー及び温室効果ガスは大学全体の値を表記
 その他は札幌キャンパスあるいは札幌キャンパスと函館キャンパスの合計値を表記
 ※2 温室効果ガス排出量の内、Scope3は4年度ごとに算定することとしており、
 2023年度及び2024年度のScope3の排出量は、2027年度に算定予定。

エネルギー消費量と再生可能エネルギー

GRI 302-1, 302-3, 302-5

一次エネルギー消費量

一次エネルギー消費量
(2024年度)

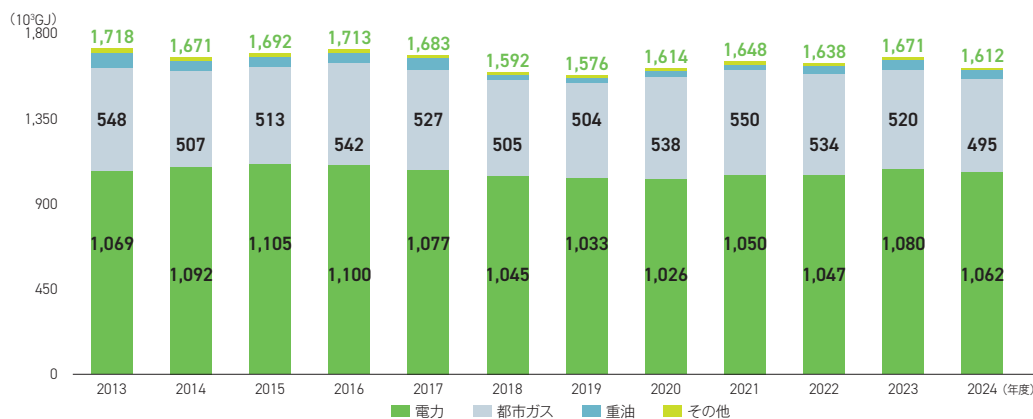
電力
1,062,426GJ

都市ガス
494,865GJ

重油
39,484GJ

その他
15,269GJ

エネルギー種別の換算計数
電力 8.64MJ/kWh
ガス 45.0MJ/m³
灯油 36.5MJ/L
重油 38.9MJ/L

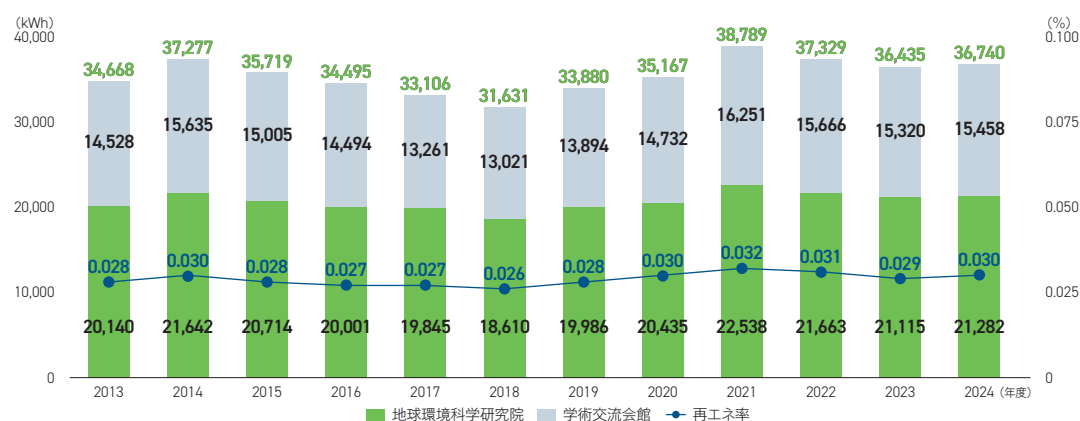


	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
電力 (GJ)	1,068,864	1,091,822	1,105,409	1,099,966	1,076,914	1,044,658	1,032,764	1,026,282	1,050,234	1,047,236	1,080,287	1,062,426
都市ガス (GJ)	547,867	506,731	512,536	541,512	526,538	504,812	503,506	537,868	550,303	534,310	520,109	494,865
重油 (GJ)	78,178	52,511	54,671	51,373	61,321	24,861	21,760	33,333	28,657	39,995	55,510	39,484
その他 (GJ)	23,354	20,006	19,862	19,936	17,803	18,065	17,964	16,741	18,771	16,827	15,285	15,269
合計	1,718,263	1,671,070	1,692,477	1,712,786	1,682,577	1,592,396	1,575,993	1,614,224	1,647,965	1,638,368	1,671,191	1,612,044

再生可能エネルギー（太陽光）発電量

自家発電／太陽光
(2024年度)

自家発電／太陽光
36,740kWh



	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
地球環境科学研究所 (kWh)	20,140	21,642	20,714	20,001	19,845	18,610	19,986	20,435	22,538	21,663	21,115	21,282
学術交流会館 (kWh)	14,528	15,635	15,005	14,494	13,261	13,021	13,894	14,732	16,251	15,666	15,320	15,458
合計	34,668	37,277	35,719	34,495	33,106	31,631	33,880	35,167	38,789	37,329	36,435	36,740
再エネ率 (%)	0.028	0.030	0.028	0.027	0.027	0.026	0.028	0.030	0.032	0.031	0.029	0.030

温室効果ガス排出

GRI 305-1, 305-2, 305-3, 305-4, 305-5, 305-7

温室効果ガス排出量

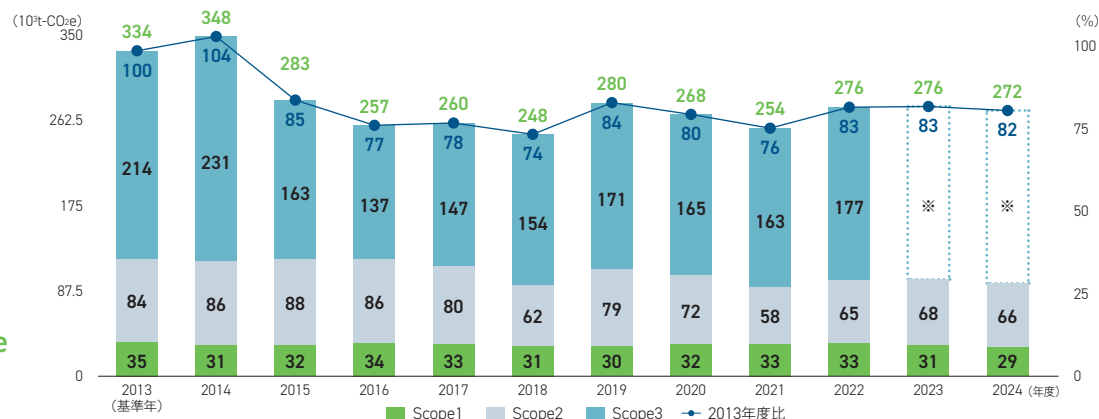


温室効果ガス
排出量
(2024年度)

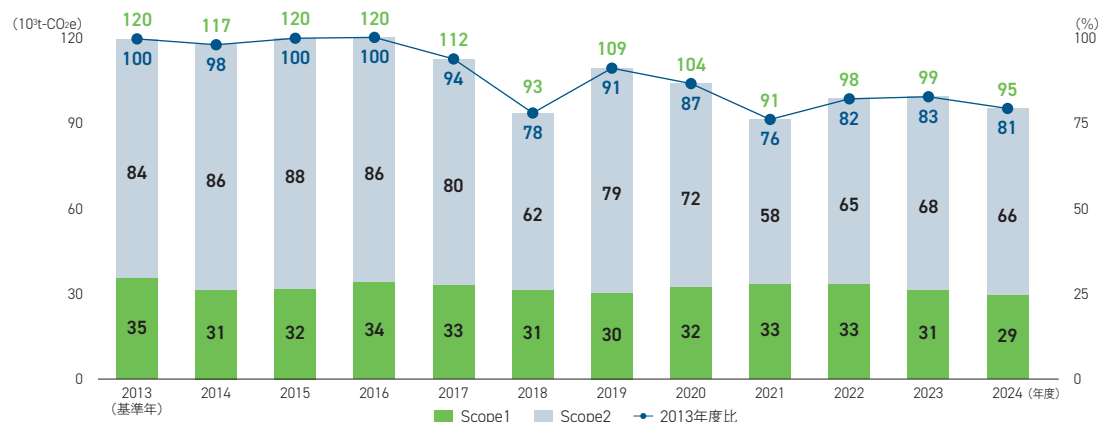
Scope1+2+3

Scope1
29,291t-CO₂eScope2
65,803t-CO₂eScope3
177,225t-CO₂e
(2022年度実績値)※

※Scope3は4年度ごとに算定することとしており、2023年度及び2024年度のScope3の排出量は2027年度に算定予定。



Scope1+2



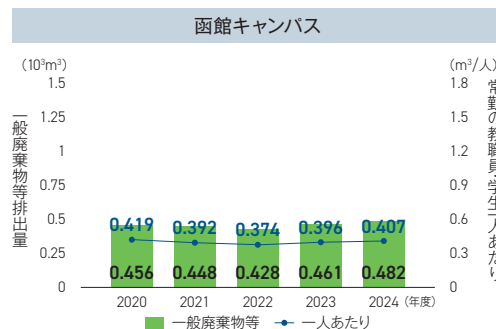
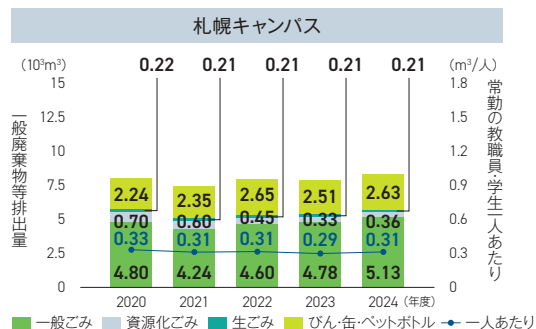
		2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
エネルギー起源CO ₂	t-CO ₂	34,239	30,049	30,430	32,698	31,355	29,808	28,791	30,210	30,584	30,483*	28,969*	26,612*
非エネルギー起源CO ₂	t-CO ₂	44	53	51	43	46	48	42	36	38	44	51	51
CH ₄	t-CO ₂ e	438	550	537	538	547	528	533	535	494	455	476	461
N ₂ O	t-CO ₂ e	191	188	199	216	212	182	235	256	236	323	425	413
HFCs	t-CO ₂ e	370	453	410	352	743	604	639	1,261	1,823	2,055	1,298	1,736
PFCs	t-CO ₂ e	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SF ₆	t-CO ₂ e	2	26	0	13	7	0	14	14	16	8	4	17
NF ₃	t-CO ₂ e	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Scope1	t-CO ₂ e	35,284	31,318	31,628	33,860	32,909	31,170	30,254	32,314	33,190	33,369	31,222	29,291
他者から供給された電気の使用	t-CO ₂ e	84,103	86,037	88,003	86,042	79,438	62,176	78,838	71,371	57,885	64,976	67,868	65,660
他者から供給された熱の使用	t-CO ₂ e	151	124	134	161	145	147	155	146	153	131	120	142
Scope2	t-CO ₂ e	84,254	86,161	88,137	86,202	79,582	62,323	78,993	71,517	58,038	65,106*	67,988*	65,803*
Scope3	t-CO ₂ e	214,004	230,685	163,265	137,093	147,027	154,418	171,155	164,500	162,967	177,225	177,225	177,225

※に示す項目の温室効果ガスについては第三者検証を受けています。

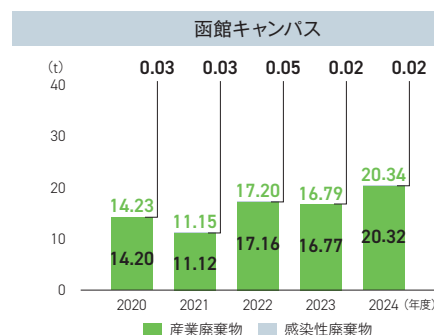
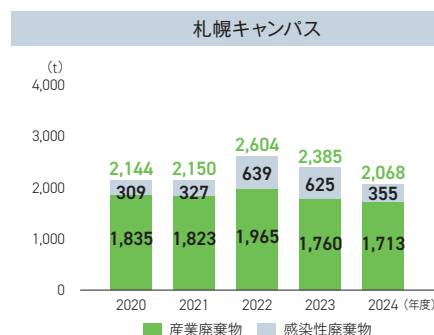
廃棄物／資源循環

GRI 306-3, 306-5

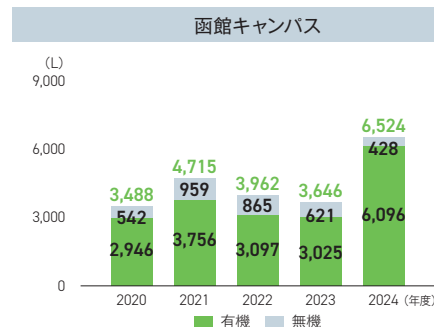
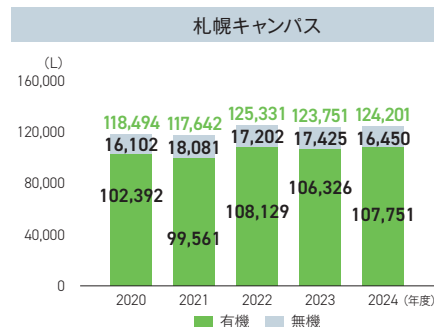
廃棄物排出量

一般廃棄物等
排出量
(2024年度)一般廃棄物
8,809m³

注1) 生ごみは大学病院給食調理施設からの排出。注2) 一人あたりの算出には、非正規雇用の教職員数を含む。注3) 函館キャンパスでは、一般廃棄物等にびん・ペットボトルを含む。札幌キャンパス一般ごみについて、サステナビリティレポート2022に記載した2020年度の値に誤りがありました。本レポートにて修正しています。

産業廃棄物
排出量
(2024年度)産業廃棄物
1,733t感染性廃棄物
355t

注) 札幌キャンパスは、「特定家庭用機器再商品化法」品目を除く。函館キャンパスは廃家電を含む。

実験廃液
排出量
(2024年度)有機
113,847L無機
16,878L

注) 地方施設を含む。

水使用量

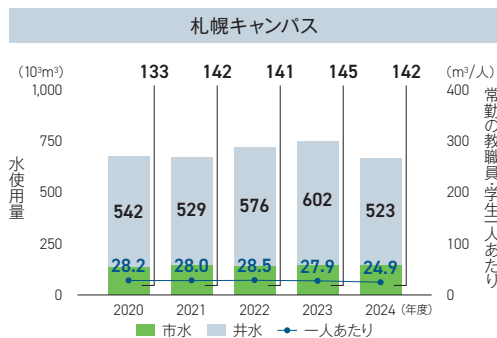
GRI 303-3, 303-4, 303-5

水使用量

水使用量
(2024年度)

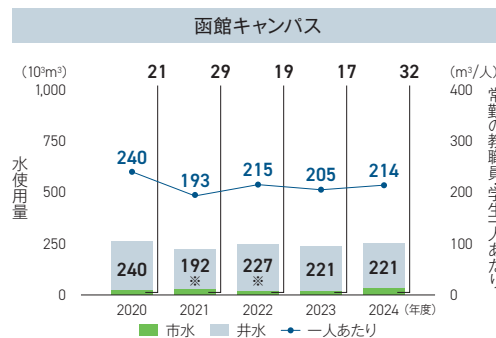
市水
174,723m³

井水
743,266m³



	市水(m³)	井水(m³)	一人あたり(m³/人)
2020年度	132,952	541,755	28.2
2021年度	141,756	529,138	28.0
2022年度	141,151	575,954	28.5
2023年度	144,627	601,987	27.9
2024年度	142,474	522,514	24.9

注) 一人あたりの算出には、非正規雇用の教職員数を含む。



	市水(m³)	井水(m³)	一人あたり(m³/人)
2020年度	20,518	240,420	240
2021年度	28,845	191,679	193
2022年度	18,950	226,859	215
2023年度	17,317	220,752	205
2024年度	32,249	220,752	214

※函館キャンパスの井水使用量はメーター故障のため推定値

生物多様性

GRI 304-1

生物多様性にとって重要な地域を含む拠点



保護地域と重複あるいは隣接する拠点(2025年3月時点)

拠点	所在地	拠点の敷地面積(ha)	重複・隣接する保護地域(カッコ内は本学拠点敷地と重複する区域・面積)
天塩研究林	北海道天塩郡幌延町	22,517	【重複】北海道指定北大天塩研究林鳥獣保護区(323ha) 【隣接】北海道指定知駒鳥獣保護区
中川研究林	北海道中川郡音威子府村 北海道中川郡中川町	19,364	【重複】北海道指定北大中川研究林鳥獣保護区(ほぼ全域)
雨龍研究林	北海道雨竜郡幌加内町	24,953	【重複】北海道指定北大雨龍研究林母子里地区鳥獣保護区(698ha) 【隣接】朱鞠内道立自然公園、北海道指定西風連鳥獣保護区
札幌研究林豊平試験地 一の沢地区	北海道札幌市南区	62	【重複】北海道指定北大一の沢鳥獣保護区(全域)
札幌研究林豊平試験地 簾舞地区	北海道札幌市南区	32	【重複】北海道指定北大簾舞鳥獣保護区(全域)
苫小牧研究林	北海道苫小牧市	2,715	【重複】北海道指定北大苫小牧研究林鳥獣保護区(ほぼ全域) 【隣接】北海道指定王子山鳥獣保護区
和歌山研究林	和歌山県東牟婁郡古座川町	449	【重複】古座川県立自然公園(全域)
静内研究牧場	北海道日高郡新ひだか町	463	【重複】北海道指定旧新冠種畜牧場鳥獣保護区(全域)
厚岸臨海実験所	北海道厚岸郡厚岸町	40	【重複】厚岸霧多布昆布森国定公園(全域)、北海道指定厚岸鳥獣保護区(全域)

自然共生サイトの認定を受けている拠点(2025年3月時点)

保護地域との重複を除いた区域が保護地域以外で生物多様性保全に資する地域として、OECM国際データベースに登録

拠点	所在地	拠点の敷地面積(ha)	自然共生サイト(カッコ内は認定を受けた区域・面積)
札幌キャンパス	北海道札幌市北区	178	北海道大学札幌キャンパス(126ha)
雨龍研究林	北海道雨竜郡幌加内町	24,953	北海道大学雨龍研究林(全域)※国際データベースへの登録面積は24,170ha

グリーントランスフォーメーション (GX) の推進

GRI 302-4, 302-5, 305-1, 305-2, 305-3, 305-4, 305-5, 305-7

北大の温室効果ガスの包括的なデータベース 「北海道大学 GHG インベントリ2022」策定



カーボンニュートラル実現のためには、温室効果ガス（以下、GHG）の現状を適正に把握することがスタートラインとなります。北海道大学では、2024年10月、本学のGHGに関する排出量等のデータを体系的にとりまとめた「北海道大学 GHG インベントリ2022」を策定しました。

本インベントリでは、国際協定や国の政策で規定される7種類のGHG（CO₂、CH₄、N₂O、HFCs、PFCs、SF₆、NF₃）を対象に、Scope1・2・3※1の区分に基づきながら、本学の全拠点・活動を網羅する包括的なGHGデータベースを整備しました（具体的な成果の一つであるGHG排出量の推移データについてはP24をご参照ください）。

その作成にあたっては、2050年までの長期的活用を見据え、透明性・再現性の確保を重視しました。国際基準であるGHGプロトコル※2への準拠をベースに、作成方法や算定プロセス、エビデンスデータの詳細に至るまでを体系的に明文化し、信頼性の高いデータベースの構築を図っています。

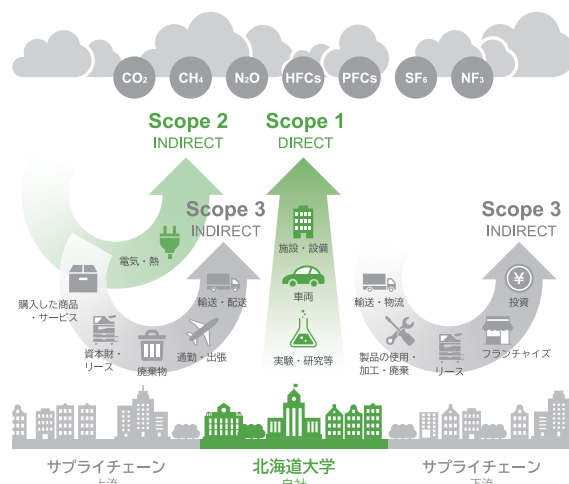
今後は、計画立案・アクション実行のフェーズに移行、インベントリのデータを活用しながら「Climate Action Plan」（仮称）を策定予定です。なお、インベントリのデータは定期的に更新し、GHG排出量等の経年変化を継続的に追跡しながら当該プランやアクションの効果検証や改善に活用していく予定です。

「北海道大学GHGインベントリ2022」概要版・本編・解説動画をウェブサイトで公開しておりますので、ご参照ください。

🌐 <https://www.sustainability.hokudai.ac.jp/repository/ghg/>



サプライチェーン全体にわたる GHG排出の概観



（参考資料：WBCSD, WRI, GHG Protocol: Corporate Value Chain (Scope 3) Standard, 2011）

※1 Scope1・2・3

- GHGプロトコルでは、GHG排出量を以下の3つのScopeに分類しています。
- ・Scope1（直接排出量）
事業者自らのGHGの直接排出（燃料の燃焼、工業プロセス）
- ・Scope2（エネルギー起源間接排出量）
他者から供給された電気、熱・蒸気の使用に伴う間接排出
- ・Scope3（その他の間接排出量）
Scope1、Scope2以外の間接排出（事業活動に関連する他者の排出）

※2 GHGプロトコル

米国の環境NGOである「世界資源研究所（World Resources Institute, WRI）」及び「持続可能な発展のための世界経済人会議（World Business Council for Sustainable Development, WBCSD）」を中心に世界中の事業者、行政組織、NGO、学術組織など様々な利害関係者が参加し、その合意に基づいてGHGの算定・報告基準を開発するためのプロセス。

学生向けシンポジウム「北海道のGXと経済をつなぐ未来とは」を開催



2024年5月10日、GX・金融コンソーシアム「Team Sapporo-Hokkaido」と北海道大学サステナビリティ推進機構は、共催で学生向けシンポジウム「北海道のGXと経済をつなぐ未来とは」を開催し、会場・オンライン合わせて507名が参加しました。基調講演では、DNVビジネス・アシュランス・ジャパン株式会社の金留正人氏が「今後社会に出ていく学生たちが、あるべき未来を知覚・言語化して共有化し、多様な人々と価値観を受け入れ合い、そして知識とスキルを身に付けて行動することで、求める未来を創っていくことになる」と講演。パネルディスカッションでは、工学研究院の石井一英教授がモデレーターを務め、会場やオンラインの参加者を巻き込んだ議論が展開されました。



シンポジウムの様子

生物多様性の保全に関する取り組み

GRI 304-2

キャンパスの動植物の生息状況や変化を捉える生態環境調査



札幌キャンパスでは、自然環境の現状を網羅的に把握するため、生態環境調査（生物相調査）を2009年度から毎年実施しています。2024年度までの調査により、キャンパスで3,000種を超える動植物が確認されています。これらの中には、在来種のほか、環境省・北海道・札幌市のレッドリストに掲載される希少種も含まれており、大都市・札幌の中心部にありながら、札幌キャンパスが生物多様性の保全が図られている区域であることがわかります。一方で、侵略的外来種も確認されており、キャンパスの生物多様性を保全するために対応すべき課題があることも示されます。

今後も生態環境調査を継続し、調査で得られたデータをキャンパス内の希少種の保全、外来種の防除、適正な緑地管理等の基礎データとすることはもちろん、教育・研究のための資料としても活用していきます。

これまで札幌キャンパスで確認された動植物の種数（2025年3月時点）

	植物	哺乳類	鳥類	両生爬虫類	魚類	昆虫
全種	950	19	143	4	6	2,156
在来種	478	12	143	3	6	2,139
外来種	472	7	0	1	0	17
絶滅種	-	3	-	-	1	-

※生態環境調査の他、過去の文献調査の記録を含む



2024年に実施した大野池の水草調査の様子（株式会社さっぽろ自然調査館提供）

北海道の絶滅危惧植物保全に取り組む北大植物園



北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園（北大植物園）は、絶滅危惧植物の研究、保護・増殖と社会教育に取り組んでいます。

本園は、北海道と覚書を結び、北海道立総合研究機構と協力して、北海道条例指定種の生息域外保全を進めています。2011年からは様似町やアポイ岳ファンクラブとともに、アポイ岳の固有種ヒダカソウの生息域外保全に取り組み、横走する根を切り取って発芽させる「根伏せ増殖」により、複数分集団の系統を栽培・増殖しています。

また本園は、2018年から2025年までの3期にわたり環境省「生物多様性保全推進支援事業」に採択され、北海道に分布する国内希少種の生息域外保全に取り組んできました。夕張山地さりざしやまの峠山の固有種キリギシソウや、然別湖等に自生するカラフトグワイ等、それぞれの関係機関と連携しながら、種の遺伝的多様性を守ることに配慮した生息域外保全を実施しています。



ヒダカソウの増殖を題材とした植物園における保全実習の様子



環境省・関係機関との協力によるカラフトグワイの保全調査の様子

水資源の取り組み

GRI 303-1, 303-2

排水管理

本学では「北海道大学化学物質等管理規程」に基づいて、化学物質の排出抑制に取り組んでいます。実験廃液は回収し、外部委託にて最終処理を行います。実験廃液以外の排水は公共下水道へ放流しているため、校内排水経路の水質検査を毎月1回実

施し、地方自治体へ報告を行っています。この他にも定期的に自主検査を行っています。これらの徹底した排水管理は、人間・動物を含む生態系への弊害を未然に防止し、環境保全にもつながっています。



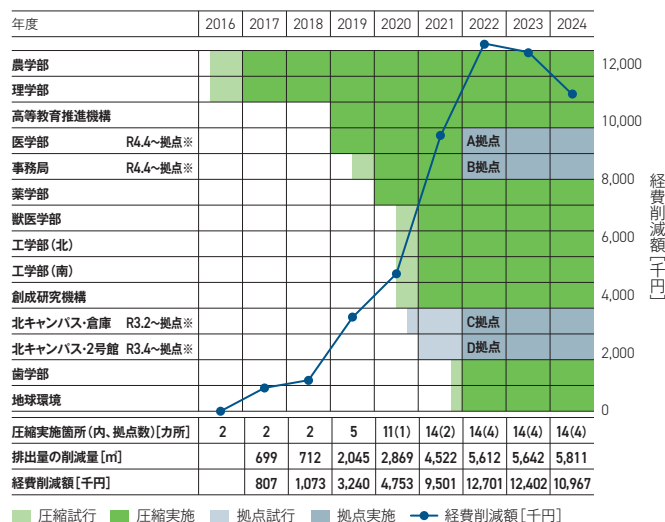
ごみ削減・資源循環の取り組み

GRI 306-2

ごみの圧縮で排出量と処理費用を削減

廃棄物減量化の取り組みとして、ごみの圧縮を行っています。札幌市の事業系一般廃棄物は体積に応じて処理費用を算出するので、ごみを圧縮することで排出されるごみの体積が減り、排出量の削減と処理費用の削減につながります。2016年度に農学部・理学部の2カ所から始まったごみ圧縮の取り組みは、段階的に拡大され、2023年度以降は14部局にまで広がっています。これにより、札幌キャンパス全体のごみ処理費用の削減に貢献しています。ごみ圧縮事業の効果として、2024年度には未実施時と比較して約1,097万円の費用削減が達成され、2016年度の事業開始からの累計では約5,544万円の削減効果が得られています。

※拠点：圧縮実施箇所内、排出量が少ない周辺の保管庫からも廃棄物を収集・圧縮を行っている場所



キャンパスの大掃除「キャンパス・クリーン・デー」

全学一斉の構内清掃作業として「キャンパス・クリーン・デー」を、札幌キャンパスでは2024年5月15日に、函館キャンパスでは同月22日に実施しました。今回で21回目。両日ともに多数の学生と教職員が参加し、清掃活動を行いました。「キャンパス・クリーン・デー」は快適で安全なキャンパス環境を維持することを目的に、春の恒例行事として定着しています。



札幌キャンパス百年記念会館の前で挨拶をする資金清博総長



札幌キャンパスでは学生・教職員等、約3,500名が参加



環境コンプライアンス

GRI 2-25, 2-27, 303-2, 306-1, 306-2, 308-2

環境関連法規等の遵守状況



本学は、コンプライアンスの重要性を深く認識し、全学でコンプライアンスの維持及び推進等に取り組んでおります（本学のコンプライアンスの概要はP10も併せてご参照ください）。環境関連の法令・規制については、施設部環境配慮促進課及び安全衛生本部を中心に、各法令に対応する組織が、それぞれの役割に応じてコンプライアンスの維持と推進に努めています。

法令違反が発生した場合は、全学でその状況を共有・把握できるコンプライアンス体制を構築しており、2024年度においては、法令違反に該当する事象、罰金の支払い等は発生しておりません。また、法令に基づく監督官庁からの指導・勧告に該当する事象も発生しておりません。

なお本学では、環境マネジメント施策の一環として、環境に関する法定検査や自主検査を実施しております。2024年度においては、これらの検査を通じて、事故や問題の発生を把握し、監督官庁への報告等を行った事案が1件（以下）ありました。

- 下水排水に含まれる水質汚濁防止法有害物質の確認
＜2024年8月発生＞
（排水の水質改善措置を実施した上で、監督官庁へ報告）

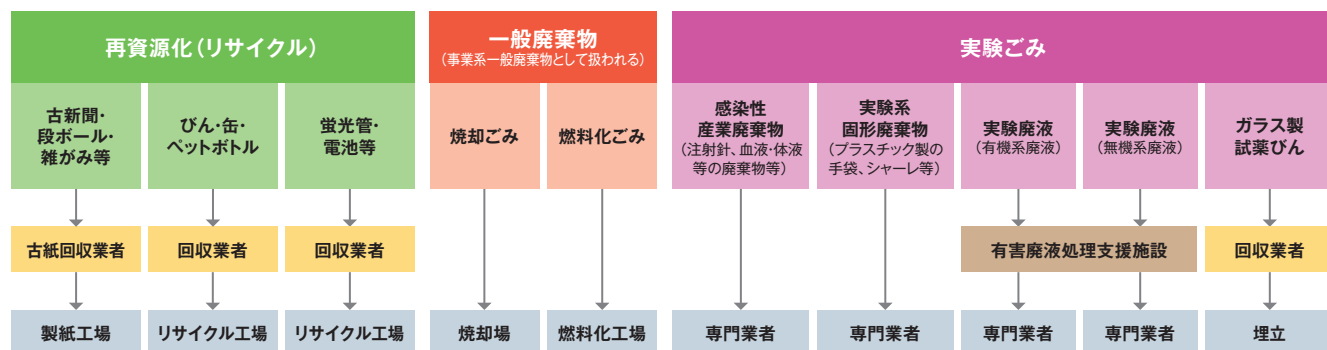
今後も現行法制度への対応を継続するとともに、施行予定の法制度に対する準備体制の充実を図り、万全の対応を図ってまいります。

廃棄物の処分方法



本学では、廃棄物の発生抑制（Reduce）、再利用（Reuse）、リサイクル（Recycle）に取り組んでいます。また、一般ごみ・実験ごみ等については分別ルールを明文化して発信し、管理規定に基づいて適切な処理を行っています。

再資源化・廃棄物の流れ（主なもの）



有害廃棄物の適正処理

本学では、「北海道大学化学物質等管理規程」に基づいて、化学物質の排出抑制や安全教育に取り組んでいます。

化学物質は北海道大学化学物質管理システムによる一元管理を実施しています。本学が化学物質取り扱いの管理を行い、実験廃液の回収、下水排水管理、化学物質排出把握管理促進法（PRTR法）に基づく対象物質の排出移動

量の届け出を行っています。

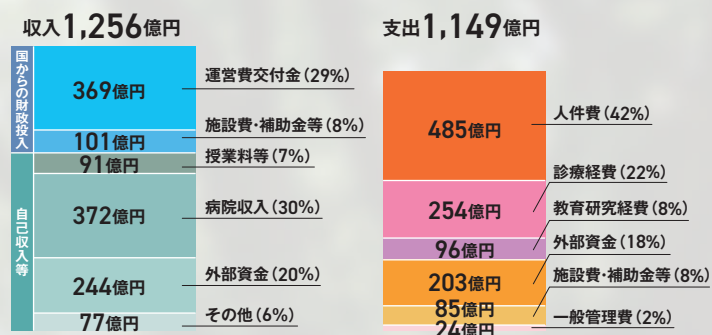
回収した実験廃液は最終処理を外部委託し、有機系廃液は焼却処理、無機系廃液は沈殿処理等を行い、発生する汚泥は焼却後管理型処分場に埋め立てています。有害廃液処理支援施設では処理を外部委託し、毎年適正処理の確認を行っています。

2024年度の財務構造と損益計算書

GRI 201-1, 201-4

収入・支出決算の内訳

現金収支の決算報告書を元に財務構造を示します。運営資金である収入は運営費交付金等の国からの財政投入約4割に対して自己収入等約6割となっております。支出は人件費が約4割となっております。なお、収入においては、運営費交付金及び外部資金等の翌事業年度への繰り越し分73億円、国立大学北海道大学債券（北大Ambitious債）発行に伴う収入34億円が含まれます。



※各金額は単位未満を切り捨てているため、計は一致しない場合があります。

損益計算書 (P/L)

経常費用は、1,139億円と前年度より35億円増加しています。主に産学連携活動の活性化による受託・共同研究経費等の増加、物価上昇等の影響に伴う診療経費の増加によるものです。

経常収益は、1,141億円と前年度より46億円増加しています。主に受託・共同研究の拡大に加え、手術件数の増加等により附属病院収益が増加したことによるものです。

単位：百万円

費用				収益			
	2023年度	2024年度	増減		2023年度	2024年度	増減
I 経常費用①	110,393	113,928	3,535	I 経常収益②	109,457	114,050	4,593
業務費	106,777	110,482	3,705	運営費交付金収益	36,264	36,078	△ 186
教育経費	7,463	8,033	570	学生納付金収益	10,578	10,626	48
研究経費	10,297	9,938	△ 359	附属病院収益	35,996	37,649	1,653
診療経費	24,541	25,818	1,277	受託・共同研究収益等	13,713	15,697	1,984
教育研究支援経費	1,114	1,033	△ 81	寄附金収益	3,747	3,575	△ 172
受託・共同研究費等	13,048	14,723	1,675	施設費収益	145	175	30
人件費	50,312	50,935	623	補助金収益	5,566	6,156	590
一般管理費	3,554	3,363	△ 191	財務収益	6	41	35
財務費用	60	81	21	雑益	3,438	4,049	611
雑損	—	0	0	II 臨時利益④	58	45	△ 13
II 臨時損失③	455	440	△ 15	目的積立金等取崩額⑤	397	167	△ 230
費用合計	110,849	114,368	3,519	収益合計	109,913	114,263	4,350
I 経常利益	⑥=②-①	△ 935		2023年度	2024年度	増減	
II 当期純利益	⑦=⑥+④-③	△ 1,333		△ 935	121	1,056	
III 当期総利益	⑧=⑦+⑤	△ 935		△ 272	△ 105	830	

※各金額は単位未満を切り捨てているため、計は一致しない場合があります。

地域への貢献、地域との連携

GRI 203-1, 203-2, 413-1

エア・ウォーター株式会社が本学理系院生に奨学金

本学とエア・ウォーター株式会社は、2024年12月6日、人材育成に関する連携協定を締結しました。本連携に基づいて実施する「協働教育研究支援プログラム」では、エア・ウォーター社による寄付を原資として、理系大学院への進学を予定する学生に奨学金を給付し、研究に専念できる環境づくりを支援します。対象は、農業・食糧分野、エネルギー分野で社会貢献を目指す学生。2025年度から5年間で15名に、修士課程の2年間にわたり返済不要の奨学金（1名あたり240万円）を給付し、さらに受給学生の研究室にも2年間で50万円を寄付します。支援総額は4,350万円を予定。連携協定では「教育、研究、社会の発展・向上に関して相互支援すること」等も盛り込まれており、本連携を通じてグローバル社会や地域社会で活躍できる人材の育成と、持続可能な発展やWell-being 社会の実現を目指します。



調印式の様子

（写真左から：エア・ウォーター株式会社 豊田喜久夫会長、實金清博総長）

Rapidus 株式会社と包括連携協定 ― 人材育成・研究開発強化へ



締結式の様子（写真左から：實金清博総長、Rapidus株式会社 小池淳義社長）

2024年6月5日、本学とRapidus社は、半導体産業を通じて日本の科学技術力の向上及び人材育成に資することを目的として、教育・研究に関する包括連携協定を締結しました。北海道において半導体産業の振興が急速に進む中、人材育成や研究開発の強化が課題とされています。こうした状況を踏まえ、2025年4月のパイロットライン稼働や2027年の量産開始後を見据え、長期的な高度人材の育成や先端半導体研究等における連携を進めていきます。

当面は、本学によるRapidus社の半導体拠点整備への協力をはじめ、半導体人材の育成や先端半導体研究等において連携を図ります。具体的には、Rapidus社が2ナノ半導体の評価・分析を行う拠点を、本学キャンパス内に設置するほか、先端半導体の研究開発事業の促進や実務家教員の派遣による講義等を行っていきます。

NHK 札幌放送局と包括連携協定を締結

2025年にラジオ放送開始から100年の節目を迎えるNHKと、2026年に創基150周年を迎える本学は、2024年4月9日に包括連携協定を締結しました。これを機に、北海道が抱える社会的課題の解決と地域社会の活性化を牽引し、双方の資産を生かした教育・研究の振興や人材育成を協力して推進していきます。

締結式で、NHK札幌放送局の出田恵三局長（当時）は「北海道大学とNHKの双方には、北海道の民族・文化・自然環境の多様性とその歴史が、文献や標本、映像として残されています。互いの優れたアーカイブを発掘することは、歴史に学び、未来への指針となるはずです」とコメント。實金総長は「『持続可能なWell-being 社会』の実現を、NHKと共に目指してまいります」と語りました。



NHK札幌放送局 出田恵三局長（当時・左）と實金清博総長

北海道大学×日本証券業協会SDGsシンポジウムに横田理事登壇



2025年3月14日、本学及び日本証券業協会の主催でSDGsシンポジウム「北海道から拓く持続可能な未来 -産官学連携によるGX金融の推進-」がハイブリッド形式で開催されました。本学の横田篤理事・副学長が基調講演を行い、「北海道大学のサステナビリティ・SDGsへの取り組み」について紹介しました。引き続き行われたパネルディスカッションでは横田理事と宮下和士北方生物圏フィールド科学センター長が登壇し、本学がTeam Sapporo-Hokkaidoに参画し、GX推進に向けた産官学連携による技術開発や、日本証券業協会・三菱UFJ信託銀行株式会社と連携して金融人材育成に取り組んでいること等が紹介されました。



基調講演を行う横田理事・副学長。会場は東京ミッドタウン八重洲カンファレンス

インフラ投資と調達に関する取り組み

GRI 203-1, 308-1, 414-1

インフラ長寿命化計画の改定

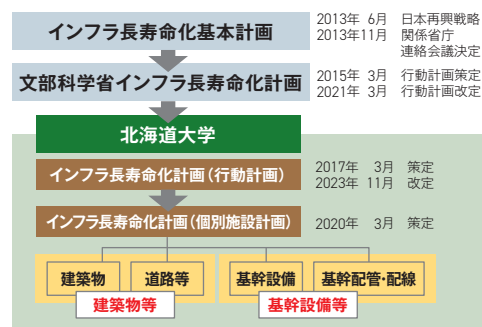


本学は、約150年にわたる歴史の中で教育・研究活動を支えるインフラの整備・運営を継続してきましたが、高度経済成長期に急速に整備された多くの施設は、老朽化への対応が求められる段階にあり、計画的な修繕及び更新が必要となっています。

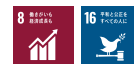
このような状況を踏まえ、2017年3月、本学が保有するインフラの現状を的確に把握し、維持管理・更新を着実に進めるための中長期的な方向性として「インフラ長寿命化計画（行動計画）」を策定しました。加えて2020年3月には、個々の施設ごとの具体的な対応を示す「個別施設計画」も策定しています。

これらの計画は、柔軟な計画運用のために定期的な見直しを行うこととしており、2023年度には行動計画を改定、2025年度には個別施設計画の改定を予定しています。

インフラ長寿命化計画の体系



責任ある取引・調達の推進



2024年度における調達実績（一部）

①環境物品等の調達

- 概要 …… 環境物品等の調達実績では、以下の項目についての概要を取りまとめ、公表しました。
- (1) 特定調達品目の調達状況（概ね100%の調達実績）
 - (2) その他の物品、役務の調達に当たっての環境配慮の実績
 - (3) 当該年度調達実績に関する評価

②障がい者就労施設等からの物品等の調達

- 実績 …… 契約件数は37件。金額は3,025,573円
- 方針 …… 2025年度における方針を定め、公表しています。

③中小企業者に関する契約

- 方針 …… 中小企業者に関する契約の方針について公表しています。

詳細については、「北海道大学調達情報ホームページ」をご参照ください。（トップページから「各種公表事項」のページへ）

<https://north.finance.hokudai.ac.jp/~chotatsu/index.html>



本学構成員の性別の推移

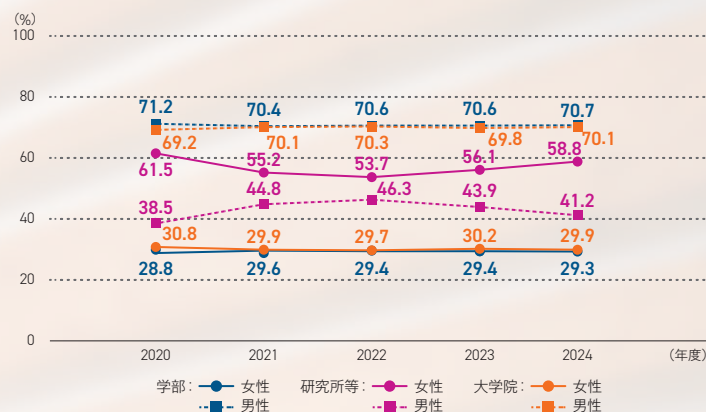
GRI 2-7, 405-1

学部生・大学院生の性別の推移



本学の学部・研究所等、並びに大学院における学生の性別の内訳の推移は次のグラフの通りです。

学生の性別の内訳



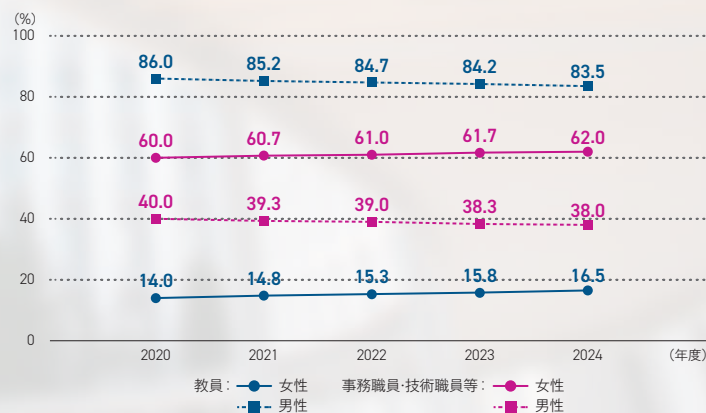
	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
学部	8,160	3,302	8,139	3,422	8,091	3,364	7,992	3,323	8,032	3,332
研究所等	25	40	26	32	44	51	69	88	56	80
大学院	4,553	2,026	4,592	1,960	4,598	1,946	4,599	1,986	4,583	1,953

教職員の性別の推移



本学の教職員の性別の内訳の推移は次のグラフの通りです。

教職員の性別の内訳



	2020年度		2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
教員	2,000	325	1,966	341	1,967	355	1,969	369	1,994	394
事務職員・技術職員等	1,297	1,944	1,320	2,039	1,323	2,065	1,309	2,112	1,330	2,171

社会連携

GRI 413-1

函館市と包括連携協定を締結

本学は、函館キャンパスの所在地である函館市と、包括連携協定を2025年1月31日に締結しました。本学が有する知見と函館市による地域づくりとが連携することにより、相互に協力・発展しながら、地域課題や社会課題の解決に寄与していくことを目的としています。

<連携・協力内容>

- ①産学官連携による地域活性化に関する事項
- ②地域の未来を担う人材育成に関する事項
- ③大学の知見および地域づくりの連携による付加価値の創造に関する事項
- ④SDGsの推進に関する事項



包括連携協定の締結の様子。函館市の大泉潤市長（左）と實金清博総長（右）

「自治体×北大まろごと交流祭!!」を開催

本学では、自治体との連携による地域の課題解決・活性化に向けて、学内外の方が自治体のことを知り、つながるきっかけとなる場として「自治体×北大まろごと交流祭」を2024年度から実施しています。本イベントは、「北大から自治体への全学的な人の流れの拡大・加速化」「自治体と北大の連携による教育・研究の可能性の探索とネットワークづくり」を目的とし、7月12日の「上士幌町×北大まろごと交流祭」を皮切りに全6回開催。会場である北海道大学オープンイノベーションハブ「エンレイソウ」で企画展示やマルシェ、交流会、ディスカッションを通して学生たちが自治体に興味を持ち、地域課題の解決をみんなで考える場となっています。

開催日	イベント名称	参加人数
7月12日	上士幌町×北大まろごと交流祭	延べ約500名
8月30日	知床・斜里町×北大まろごと交流祭	延べ約600名
10月11日	東胆振1市4町×北大まろごと交流祭	延べ約600名
10月25日	和歌山県古座川町×北大まろごと交流祭	延べ約1,000名
12月14日・15日	上士幌町×厚真町×北大まろごと交流祭 in チ・カ・ホ	約1,500名
12月18日	マリ共和国×浦幌町×北大まろごと交流祭	116名



「知床・斜里町×北大まろごと交流祭」の集合写真

安全衛生

GRI 403-1, 403-3, 403-4, 403-5

安全衛生本部が衛生管理者連絡会を開催

安全衛生本部では、2024年7月5日に安全衛生業務に従事する教職員を対象とした衛生管理者連絡会を開催し、対面11名・オンライン26名の合計37名が参加しました。

会議では、安全衛生本部の川上貴教教授が、本学の安全教育体制、消火活動のためのハザードマップ、衛生管理者と産業医による職場巡視体制、事故情報収集体制等について説明された後、参加者から部局で担当している安全衛生業務についての悩みや意見、質問等が寄せられ、活発な意見交換が行われました。



衛生管理者連絡会の様子

研修と教育

GRI 2-24, 2-29, 404-2

出張FD・SD「北海道大学サステナビリティ宣言と教育研究活動」を実施



サステナビリティ推進機構では、第4期中期目標・中期計画で掲げる「SDGsの達成に貢献する」ことへの理解を深めるため、2022年12月から各部局等出張FD（Faculty Development）・SD（Staff Development）を実施しています。本研修は2022年から全教職員を対象に実施しており、2024年からは、8月に策定した「北海道大学サステナビリティ宣言」と4つの目指す姿をテーマに実施しています。本研修は、横田 篤理事・副学長と出村 誠総長特命参与・名誉教授が講師を務め、研修を通して学内エンゲージメントの強化に取り組んでいます。



農学研究院での出張FD・SDの様子

【出張FD・SD「北海道大学サステナビリティ宣言と教育研究活動」】

<https://www.sustainability.hokudai.ac.jp/15055/>


Diversity, Equity, and Inclusion (DEI)

GRI 410-1, 413-1

札幌キャンパス・函館キャンパスの「バリアフリーマップ」を作成



学生相談総合センターアクセシビリティ支援室では、ピアサポーターの協力を得て、札幌キャンパス・函館キャンパスの「バリアフリーマップ」を作成しました。

このマップには、障がいのある方がキャンパス内を移動しやすくなるよう、段差やスロープ、建物の接続・入口状況等をわかりやすく表示しています。また、マップは本センターWebサイトにも掲載されています。

<https://www.sacc.hokudai.ac.jp/about/>


北海道大学 札幌キャンパス バリアフリーマップ

「北海道大学 2024 DEI キャンペーン 連続講演会」を開催



本学は、学内の多様性・公平性・包摂性を保証する観点で、教育研究環境の整備と、全学的な意識の醸成に取り組んでいます。ダイバーシティ・インクルージョン推進本部（DEI推進本部）では、本学が目指す「世界の課題解決に貢献するDEI（Diversity, Equity, and Inclusion）」に向けて、本学構成員がDEIへの理解をより一層深め共有することを目的に、全4回の連続講演会を開催しました。2024年11月15日には、パープルリボン講演会「デートDVって知っていますか？～傍観者にならないために～」、12月4日には障害者週間（12月3日～9日）に合わせた特別講演会「耳が聞こえなくなったら～難病の子供を持ち、大企業を辞めて起業するまで～」等を開催。教職員・学生等延べ213名が参加しました。



講演会リーフレット



「デートDVって知っていますか？～傍観者にならないために～」開催の様子

編集方針について

GRI 2-2, 2-4, 2-5, 2-14

編集方針

「北海道大学サステナビリティレポート2025」は、すべてのステークホルダーの皆様とのエンゲージメントツールとして、本学のサステナビリティに関する情報を開示するものです。

本レポートでは、サステナビリティ報告のための国際的に信頼できる確かな枠組みを提供している「GRIスタンダード」を参照し、経済・環境・社会に与えるインパクトの3つの側面から報告し、「持続可能な開発目標 (SDGs)」との関係性を明記しました。併せて、環境情報について

では「環境報告ガイドライン(2018年版)」を参照しています。

なお、本レポートは、「環境情報の提供の促進等による特定事業者等の環境に配慮した事業活動の促進に関する法律」(環境配慮促進法)に基づく「環境報告書」に相当する年次報告書として、2005年から毎年発行しているものですが、環境面だけでなく、経済面、社会面を含めた総合的な情報開示のため、2020年から「サステナビリティレポート」に改題しております。

参照したガイドライン等

●「持続可能な開発目標 (SDGs)」(国際連合)

2015年の国連サミットで採択された、2030年までに達成を目指す世界共通の目標です。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成されています。

●「GRIスタンダード」(Global Reporting Initiative)

企業の環境に関する行動について透明性を高めることを目的にオランダで設立された国際的な非営利団体GRI(Global Reporting Initiative)が作成した枠組みです。現在多くの組織・企業により参照されているESG情報の開示枠組みの一つとなっています。

●「環境報告ガイドライン(2018年版)」(環境省)

環境省が作成した環境報告を行う際の報告指針で、環境報告で報告する事項と、報告に際しての留意点が示されています。

北海道大学×SDGs

<https://sdgs.hokudai.ac.jp/>

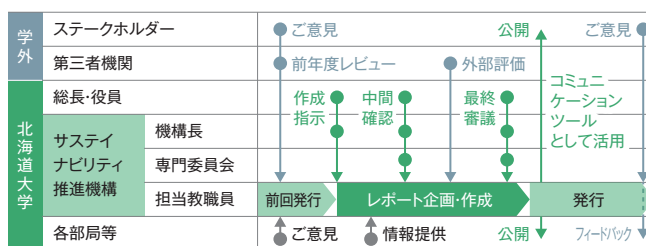
GRIスタンダード対照表 / 環境報告ガイドライン(2018年版)対照表

https://www.sustainability.hokudai.ac.jp/repository/sustainability_report/



編集プロセス

本レポートは、北海道大学のサステナビリティに関する情報を適切に開示することを目的として、北海道大学サステナビリティ推進機構が主体となって企画・作成し、学内での審議や第三者によるレビューを経て取りまとめたものです。



対象組織

このレポートは、北海道大学の全拠点・活動を対象としています。ただし、環境データについては、原則、本学のキャンパス(札幌キャンパス・函館キャンパス)を対象としており、それ以外の項目で対象範囲が異なる場合は、項目ごとにその範囲を明記しています。

レポート内のアイコン等について

目次及び記事内に記載されている数字は、SDGsのゴールとGRIスタンダードの開示項目を表しています。

例) ●SDGsのゴール



●GRIスタンダードの開示項目

GRI 102-16, 102-27

情報の修正・訂正

過去の報告期間で提示した情報からの修正・訂正については、以下の通りです。

- 一次エネルギー消費量、再生可能エネルギー発電量及び温室効果ガス排出量については、2024年10月の「北海道大学GHGインベントリ」策定に伴い、より精度の高いデータ整備方法を導入したため、サステナビリティレポート2025より、これらのデータの報告方法（算定対象範囲、対象期間等）を更新しております。

外部評価報告書

「北海道大学 サステナビリティレポート2025」は、9月17日付でエイチ・イー・エス推進機構から、以下を結論とする審査報告書をいただいています。

【審査結論】（抜粋）

- ①北海道大学サステナビリティレポート2025における環境活動及び実績記載内容は、「環境配慮促進法」での環境報告の記載事項を網羅しており、「環境報告書ガイドライン2018年版」の記載事項に沿った内容です。その「正確性」、「妥当性」及び「適切性」を確認しました。
- ②サステナブルキャンパス構築に向けて、新たなカーボンニュートラル推進部門における専門委員会と各WGの活動が着実に運用されております。
- ③サステナビリティ推進機構では、「キャンパスマネジメント部門」、「SDGs事業推進部門」、新設された「カーボンニュートラル推進部門」それぞれに専門人材を配置し、意図した成果に向けたしくみが構築されております。
- ④既存建築物の改修、新設計の建築において高い省エネ効果を発揮できる事例が実施されており、これらは参考として特筆すべき内容です。



北海道大学の主な広報誌

本サステナビリティレポートは、本学の主な広報誌である「北海道大学概要」及び「北海道大学統合報告書」と表紙のデザインを統一して発行しております。これらの広報誌を通して、ステークホルダーの皆様へ、本学に関する情報をより分かりやすくお伝えすることを目指しています。



北海道大学概要 2025年度(2025-2026)版
● <https://www.hokudai.ac.jp/introduction/information/brief/>



北海道大学 統合報告書2025
● <https://www.hokudai.ac.jp/publications/integrated/>



北海道大学 サステナビリティレポート2025
● https://www.sustainability.hokudai.ac.jp/repository/sustainability_report/





HOKKAIDO UNIVERSITY

北海道大学にとってエンレイソウはシンボルマークに使われている象徴的な花です。このデザインは、エンレイソウを「ヒト」に見立て、知性・個性・多様性の融合とすることで、コミュニケーションビジュアルとしました。花の持つ美しいラインに注目し、線の重なりが「ヒト」との関わり・知識の象徴などを表現しています。エンレイソウが持つ美しいシルエットは、北大にふさわしい、アカデミックでファッショナブルなイメージを構成します。

ホクダイ イヨカシトゥリレ カンピ

表紙に記載された「ホクダイ イヨカシトゥリレ カンピ」は、「サステイナビリティレポート」のアイヌ語訳で、「イヨカシトゥリレ＝物事を次世代に持続させる、カンピ＝冊子」という意味を表します。本学では、この土地の先住民族であるアイヌに深い敬意を表するため、キャンパスにおけるアイヌ語の普及を進めています。こうした取組は、本学構成員やステークホルダーにアイヌ文化への理解を深める機会を提供するだけでなく、アイヌ語の使用が当たり前の社会の実現に繋がるものです。

北海道大学 サステイナビリティレポート 2025

発行 サステイナビリティ推進機構
所在地 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目
電話 011-706-3660
FAX 011-706-4884
メール osc@osc.hokudai.ac.jp
Web <https://www.sustainability.hokudai.ac.jp/>

北海道大学サステイナビリティレポート2025はサステイナビリティ推進機構ウェブサイトに掲載されています。右記、二次元コードからご覧いただけます。



発行日 2025年9月
対象期間 2024年度(2024年4月～2025年3月)
報告サイクル 年1回(前回の発行日:2024年9月)



この冊子は、
環境に配慮した植物油インキ
(ベジタブルオイルインキ)を
使用しています。